ある男と河童の道理外

ありそーす

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある男は釣りをしていた。そこに薄紫髪の少女が現れ、その釣りを眺めていた。日が暮れ、男は少女に家へ帰るように促す。　しかし、少女は自分は河童なので帰る必要はないと言った。男は冗談だと思った。きっとこの子は捨て子か何かであろうと思ったのだ。そう思ったのだが―。

これは悲しき物語。

幻想郷に大きな結界が出来るより昔の物語。
決して結ばれるべきでない二人が道理を投げ捨て幸せを求める物語。
愛を知らぬ男とひとりぼっちの妖怪が共に歩もうとする物語。

目次

第一話 ―― 1
第二話 ―― 13
第三話 ―― 26
第四話 ―― 37
閑話　それぞれの生い立ちと思い ―― 53
第五話 ―― 62
第六話 ―― 80
第七話 ―― 90
第八話 ―― 98
第九話 ―― 107
第十話 ―― 117
閑話　ある河童の日記 ―― 127
第十一話 ―― 136
第十二話 ―― 148
第十三話 ―― 158
第十四話 ―― 168
第十五話 ―― 176

第一話

「今日はもう遅い。釣りは終わりだ。とっとと里に帰れ」

　大地が夕陽で染められる刻、男は河辺に座る少女に里へ帰るよう促したが…

「里にあたしの家なんてないさ。それともあんたが泊めてくれるのかい？」

「なんだ、捨て子か。まぁお前くらいの子どもなら養ってやれる余裕はある。よし、俺と帰るぞ」

「ククク…面白い奴だね。からかっているのかい？それともほんとに気づいてないのかい？」

「何言ってんだ。ほら、帰るぞ」

　男が手を差しのべるが、少女が手をとる気配はない。

「そりゃできない相談だね。あたしは河童だ。ここがあたしの住処。あんたと里で住む必要なんてないのさ」

「悪いがそんな世迷い言に付き合ってる余裕なんてなくなってきた。引っ張ってでも連

れて帰るからな」
「ちょっ！ちょっと！」
男は少女の腕を引っ張り、山を下る。
自らが妖怪だと宣言する少女を男は自分を特別な存在だと思い込んでいる子どもだと思った。
しかし、少女は本当に河童である。ただ、彼は人型の妖怪を見たことがなかったのだ。だから人の形をしたものは全て人間であると思い込んでいた。
そんな世間知らずの彼にされるがまま、気がつけば里付近へと河童は連れてこられていた。
「ここが俺の家だ。これからお前が住む場所でもある」
「ちょいと待ちな。里から大分遠い所だね。村八分でもされてるのかい？」
「あぁ、ここは余所者には厳しいらしい」
「へぇ。あんた、どこから来たんだ？」
「お前に言ってもわからないと思うが、未来の京都から来た」
「はぁ、京から来たのかい。それも未来の」
「馬鹿げてるだろ？」
「いや、ここではそんなこと珍しいことでもないさ。なにせあいつがいるからね」

「あいつ？」
「まぁまぁ。話は家に入ってからしようや。陽はとっくに暮れちまってるからね」
　男と少女は家に入り、飯の支度を終え、夕飯を取りながら話をした。
「さっきあんた、未来の京から来たって話したね」
　男は飯を掻き込む手を止め、頷いた。
「と、云うことはだ。あんたは外来人ということだね」
「外来人？」
「郷（ごう）で呼ばれている余所者の総称さ。ま、余所者と言っても多種多様だがね。あんたのように未来から来る奴もいれば過去から来る奴もいる。迷いこんで来たのか、はたまた連れてこられてきたのか…」
「連れてこられるって…誰にだよ…」
「妖怪の賢者、八雲　紫にだよ。うさんくささを身にまとったスキマ妖怪さ」
「お前、ちっこいのに物知りだな」
「はっ！だから言ってるだろ？あたしは河童だ。見た目は幼くともれっきとした妖怪なのさ。それに少なくともあんたよりは長く生きてるね」
「はいはい。そうだなお前は河童だ」
「やっと理解したかい？あんたは妖怪を家に―」

「そうだ一ついいことを教えてやろう」
「なんだい？いきなり大声出してさ」
「河童はな、緑色の肌をしていて手の水掻きが発達していて頭に皿があるんだ、ぜ…」
男が言い切る前に少女は被っている帽子を脱いでいた。
「頭に皿ならあたしにもあるよ。小さいがね」
確かに少女の頭にはつむじ大の皿があった。
「あっ…あっ…」

男は驚きのあまり開いた口が塞がらなかった。

「やれやれ、ここまでしないとわからないのかい。ま、仕方がないか、外来人だから」

「俺を…食うのか…」

男は脂汗を滲ませ、酷い貧乏ゆすりしながら呟いた。

「絞り出した言葉がそれかい？悪いがあたしは人を喰う趣味はないよ。ただ、河童は雑

食だ。あたし以外の奴らだったら尻子玉抜かれて喰われてたろう。運が良かったね。会ったのがあんたとあたしで」

そう言い終えると河童は立ち上がった。

「な、なにするんだ?」

「帰るんだよ、畔へね。あたしの住処はあそこさ。ま、これからむやみやたらに人里の外で見知らぬ人に話しかけたり、家に上げないたりしないこったね。妖怪は皆あたしみたいにお人好しじゃないんだ。」

少女は戸を開き、外へ出ようとする。

「ま、待ってくれ!」

男は震えた声で叫んだ。

「なんだい？まだ何かあるのかい？」

「名前…お前の名前を教えてほしい…」

「……『ひとり』だ。皆あたしをそう呼ぶ」

河童は帽子を深く被り直し、そう答えた。

「じゃあな。人間。せいぜい長生きしなよ」

そう言うとひとりと名乗った河童は夜の闇へと溶けていった。

俺がここに来てから今日で約1ヶ月くらいか。電子機器はおろかカレンダーすら持ってないので正確な日にちはわからない。

わからないと言えば昨日の河童だ。

妖怪の癖して俺を食わずに出ていった。そのうえ長生きしろと激励までしてきやがった。

妖怪は人の敵じゃなかったのか？それともあいつだけ異常なやつだったのか？それとも――

色々な考えが感情と共にぐるぐると廻る。

「考えても仕方がない、か」

別にいいか。もう会うこともないだろう。

「暇だな。釣りにでもいくか」

男は身支度を整え、川へと向かった。

「さすがに昨日の今日ではいないか…」

男は辺りに誰もいないことを確認した後、岸に腰を下ろし、釣り竿を構える。

―ポチャン―

浮きが水面へと浮かぶ。

辺りは静寂で聞こえるのは鳥の鳴き声か河のせせらぎ位だ。

それにしてもまさか妖怪にも人に似ている奴がいるとは…。俺が見たことがあるのは巨大な狼やら蟲やら人目で妖怪だとわかるやつだけだ。
だが、昨日のひとりというやつは違った。言葉も通じるし会話もできる。それに頭の皿以外は人間そのものだった。
今でも頭の皿さえなかったら人間だと信じられるくらいだ。

「本当に妖怪だったのか…?」
もしかして頭に何か仕掛けがあったのかもしれない。俺はそれにまんまと騙されてあいつを妖怪だと…。
「お、人間じゃないか。こんなところで何してるんだ?」
「!」
男は声の元へと振り替える。が
違う。ひとりじゃない
知らない女だった。

人か？妖怪か？　わからない。とりあえず反応せず様子を伺おう。無視だ。
視線を水面へと戻した。
「なんだよ。つれないじゃないか。教えてくれてもいいだろ？」
「…」
「釣りかい？生憎だがここじゃ雑魚しか釣れないよ。それに―」
気味の悪い気配が背後から漂う。しだいに恐怖が腹の底から湧いてくる。
「誰の許可を経てここで釣りなんかしてんだ？」
男は直感で理解した。
し、死ぬ。ここで。俺は、
死死死死
「止めな。そいつはあたしの知り合いだ」
妖怪が男を手にかけようとした瞬間、ひとりが妖怪の腕を掴み止めた。
「邪魔するなよ。早い者勝ちだろ？」

「そういう話じゃないんだよ。失せな」
「そうかそれじゃてめぇからころ―」
妖怪が動きを見せようとするが、既にその頭部はひとりの手に納まっていた。そして
「ぎゃあぎゃあとやかましい奴だね」
容赦なく踏み潰した。
「さて、あれほど忠告したのに懲りないやつだね。そんなに死にたいのかい？」
「…別に死んでもいいさ」
「よく言うよ。こんなに震えてさ。昨日だってそうさ。あたしが妖怪だと分かったら喰われると怯えてただろ。本当は死にたくなんかないんだろ？」
「…」
「まぁいいさ。家まで送ろうと思ったが止めた。死にたいのなら助けなければよかった」
「俺は…」
「…なんだい？」
「俺だって死にたくなんかないさ！でも一日生きるのだって苦しいんだ。里には入れやしない。食料だって自給自足だ。妖怪に怯えながらな。餓死も考えたさ。でも空腹が襲ってきたらそんなこと考えられなくなった。それにここに来てからのまともな会話

なんてお前が初めてだ。それまで罵声しか聞いてこなかった。死にたいと思った。でもいざ死ぬとなると怖くなったんだ。震えが止まらなくなった。生きたいと思った。でも生きるのも辛いんだよ…」

　大声で捲し立てた男はいつの間にか涙を流していた。

「…あんたの名前、聞いてなかったね。なんていうんだい？」

「雅（まさ）」

「雅か。あたしの名前覚えてるかい？」

「ひとり、だろ？」

「よく覚えてたね。じゃああたしから一つ質問だ」

「なんだ…？」

「死にたい癖になんであたしを養おうとしたんだ？」

「…それは、目的になるかもしれなかったからだ」

「目的？」

「あぁ、単なる生きるための理由付けだよ。お前みたいな少女と一緒に住めば俺に死ねない理由ができる。お前を育てることが俺の生きる目的になると思ったんだ」

　雅の言葉をひとりは黙って聞いていた。

「最低だろ？俺のエゴにお前を巻き込もうとしたんだよ」

「そうかい。よし、それじゃあたしがあんたと一緒に住んでやるよ」
「は？」
こいつ今何て言った？一緒に住むだと!?ふざけてるのか!?俺は人間であいつはようか――
「ほら立ちな！男がいつまでもみっともない格好してんじゃないよ！」
ひとりの碧色の瞳がまっすぐ俺を見つめている。
差しのべられた手を俺ははいつの間にか握っていた。
立ち上がったとき、打ち付けるような風が若葉の香りと共に俺の体を突き抜けていった。

第二話

ひとりが俺と住むと言ってから一晩たった。
何か生活に変化が起きると思っていたがそんなことはなく、昨日は何気ない平穏な日だった。
「おい、薪が無くなりそうだよ」
「そうか、なら取りに行かないとな」
「あんた一人じゃ不安だ。着いていくよ」
こいつと生活してみて分かったことがある。
それはこいつが非常にお節介なやつだということだ。
「ほら、ぼやぼやしてないでさっさと行くよ」
「分かったよ！」
ひとりに急かされながら、二人は薪を拾いに森へと向かった。

「そういえばここは魔法の森と言ってね、あんたみたいな常人じゃあとてもじゃないが居られない場所なんだが平気かい？」
「あぁ、なんともないが」
「へぇ。なら耐性があるみたいだね」
「どういうことだ？」
「ここは他の土地よりも魔力が濃くてね。耐性がない奴だと魔力酔いを起こすんだ」
「そうなのか」
「ま、あんたは心配いらないみたいだね」
「ありがとう、ひとり。心配してくれてたんだな」
「ばっ、そんなんじゃないよ！　ただあたしは―」
ひとりと一緒に住むことによって確かに生活は楽になったのかもしれない。ただ、俺は彼女に頼りっぱなしだ。

本当にこれでいいのか？
俺の胸中は未だつっかえが取れない。
「なに俯いてんだい。そんなんじゃ見えるものも見落としちまうよ」
「大袈裟だな」

手頃な木の枝を拾いつつ、俺とひとりは森の奥へと進んでいった。

「ふう、少し疲れたな」

「頃合いだね。お昼にしようか」

そう言うとひとりは腰掛けのポーチから包みを取り出し、二つある内の一つを俺に手渡した。

「それ……」

「あぁ、これかい？　意外と便利な代物だよ。見た目よりものが入るんだ。他の奴らはでかい鞄を背負ってるがあたしにはこれで十分さ」

「へぇー」

俺はひとりの説明に感心しながら、包みを開けた。

「これは、美味そうだな」

中には艶のある握り飯と俺が以前から漬けていた山菜があった。

「そうだろう？　不味いとは言わせないよ」

俺は握り飯を手に取り、かぶりついた。

「う、美味い！」

米の甘味とほどよい塩気が絶妙なバランスでほぼ完璧といえる塩にぎりだった。
「へへ、そりゃどうも」
ひとりは嬉しそうに鼻をこすった。
「でもあんたの漬けていたこの山菜も中々いけるよ」
「その漬物は見よう見まねでやったんだがうまくいってよかったよ」
こうして、俺とひとりは楽しい時間を過ごした。

ただ、その間にも俺の頭の片隅には一つの疑問が渦巻いていた。

なぜひとりは本当に俺と住んでくれているのか

常識的に考えてひとりが俺と住むことによって得るメリットはない。
ならば、これは彼女の気まぐれな遊びか？　それとも信頼しきったところを裏切って俺を笑い者にするつもりなのか？
俺の考えていることは最低だ。だが、その可能性がないとも言いきれない。
だからといってそのことを言及するつもりもない。俺は今の関係を壊したくないからだ。それに一日でも長く生きていたい。

　ひとりの施しを受けながらも俺は常に自己保身だけを考えていた。
「さて、茸でも取って帰るかね。ここで取れる茸は玉石混淆だが質の良いやつはとことん良いんだ」
「本当に物知りだな。お前」
「当たり前さ。何年ここに住んでると思ってるんだい。そこらの奴らとは訳が違うよ」
　それにしても物知りだ。水辺の妖怪にしては陸上のことを知りすぎてるような気がする。
「今、河童の癖に陸のことを知りすぎてるって思ったね？」
「あ、いや、別に」
「なに、別に責めてるわけじゃないさ。その理由も話しておこうと思ってね」
　理由？　なんだろうか？
「この前、初めて会った晩にあたしの皿を見せたろう？」
「あぁ、見せてもらった」
「端的に言えばそれが理由さ。頭の皿が退化したことによって人並みに地上で活動できるようになったのさ。ま、頭のが先か、地上での生活が先か、どっちか分からないがね」
「適応するんだな。妖怪も」
「そういうこった」

ひとりは何でも教えてくれる。聞けば答えてくれるし、聞かずとも勝手に説明しだす。ありがたいがその心遣いが重なる度に俺の心に後ろめたさという重りがミシミシとのし掛かる。

我ながらなんと面倒くさい人間なのだろうか

昔からそうだ。自分では優しいだけと思い込んでたが実際はただ弱いだけ。心が脆いだけなんだ。俺という人間は。

「……あんた、浮かない顔ばかりしてるね」

「っ！　そ、そうか？　元の顔の造りがこんなだからそう見えるんじゃないか？」

「ふぅん。話したくないなら話さないでいいよ」

「すまない。せっかく優しくしてくれてるのに……」

「いいさ。あたしの好きでやってるんだからね」

家に帰るまで、ひとりは世間話を交えながらこの”幻想郷”と呼ばれる異界（さと）のことを教えてくれた。

家に着いた頃にはすでに陽は傾いていた。
「さぁ、晩飯でも作ろうかね。あんたにも手伝ってもらうよ」
ひとりは籠を下ろし、休む間も無く飯の仕度に取りかかろうとしていた。
「もちろんだ。というより、晩は俺が作ろう。お前は昼の分を作ってくれたし、休んでてくれ」
「そうかい？　でもまぁ、なんにせよあたしも作るよ。二人の方が効率がいいだろう？」
「いいのか？　悪いな。それじゃ二人で作ろう」
そうして俺は米と主菜を、ひとりは汁物と副菜を担当し、それぞれ取りかかった。そのおかげで調理はあっという間に終わり、いつもより早い晩飯となった。

「いただきます」
まず汁から手をつける。
「ズズ……。これ美味！」
味気ないお吸い物だと思ったがなんとも深みのある味わいだ。こんな出汁、どこで……？
「驚いたかい？　その汁に入ってる丸米茸という茸が良い出汁を出すんだよ。生えてる所も比較的取りやすい場所にあって数も多いから人里でも結構使われてるみたいだよ」

「これはいいな」
丸米茸、これを入れるだけで旅館に出てくるレベルのものになるなんて、幻想郷おそるべし。

「く、……んふふふふ」
何が可笑しいのかひとりはいきなり口を抑えながら顔を背け、堪えきれなかったのか笑い声が漏れていた。
「な、何が可笑しいんだ？」
「いや、ね。あんたがあまりにも良い反応するから面白くてね。……ふふ」
「――ッ！」

ふと見えたひとりの笑顔

人間の形をしているだけなのに

本質は妖怪であるのに

きっと思ってはいけないのに

思ってしまった

想ってしまったんだ

綺　麗　だ

瞬間、俺の中に巣食っていた心の闇が祓われたような気がした。

そして、俺の心に彼女に対する愛おしさが急激に湧いてきた。

彼女の優しさが実感として胸の奥に突き刺さったんだ。

利害なんて、道理なんて関係ない。俺は

「どうしたんだい？　黙りこくってさ。もしかして気にでも障ったかい？　そりゃすまないね」

俺は―

「ひとり」

「なんだい？」

「…いや、なんでもない」

「なんだいそりゃ。まぁいいや、とっとと食べて寝な。今日は疲れたろう」

「あぁ、ありがとう。そうするよ」
まだだ。まだ言うべきでない。
告白するにはレベルが違いすぎる。あまりにも俺が未熟すぎる。もっと、もっと強く。ひとりを守れるぐらいに強くなってからでないと。ひとりにふさわしい男にならないと――！
飯をかきこみ、俺は布団を敷き、就寝態勢へと入る。
「おやすみ、ひとり」
「あぁ、おやすみ」

人も植物も寝静まった頃、ひとりは雅の隣に寝転がり、じっと顔を見つめていた。
「いつまでそうやって遊んでいるつもりなのかしら？」
「無論、死ぬまでさ。黙って観てな」
突然、天井から放たれる声にひとりは動じることなく声を返した。

「あなたとはそこそこ長い付き合いだったわね。もう少し賢いと思っていたけれど……残念だわ」
「聞こえなかったのか？　黙って観てろって言ってんだ。人の生活を盗み見ることしか能がない性悪妖怪が」
「まぁ人聞きの悪いこと。この郷に住む者たちの監視は賢者としての当然の責務。それに私は他にも結界の管理とか色々してるのよ」
「ふん。あたしは知ってんだよ。今現在に結界の管理しているのは巫女とあんたの式さ。育成だかなんだか知らないがあんたは今結界について何も触れていない。つまり、あんたが今してるのは監視という名の覗き見という悪趣味なことだけさ」
「相変わらず口が減らないわね」
「なに、何でもはぐらかすあんたほどじゃないさ」
「いいかしら。これは忠告よ。妖怪と人間の夫婦なんて不幸しか産まない。それはあなたとこの人間にとってもそうだし、生まれてくる子にだって降りかかる。あなただって分かっているでしょう？　道理から外れたものには相応の報いが―「うるさいね、こいつが起きちまうだろうが」
「それに何か勘違いしてるようだがこいつと契りを交わす気なんて更々ないよ。こんな弱っちいだけの男なんて夫になんかしたくないね。これは暇潰し、ただの遊びさ」

「……もし彼と契りを交わすようなことがあれば厳重な処置を施します」
「勝手にしな。そんなことは無いだろうがね」
ひとりがそう返答した時には天井にあったスキマは既に消えていた。
「雅…」
ひとりは雅の頭を撫でながら眠りについた。

第三話

――クルルッルホッホホー――

「ん、ふぁぁぁ」

朝に鳴く謎の鳥の声で目を覚ます。

隣ではひとりが眠っていた。

半強制的に住まわされたこの家はそれなりに広く、就寝具も数人分あったのでひとりが住んでも困ることはない。

そう言えばひとりは俺と一緒にすんで大丈夫なのだろうか？

昨日の話を聞く限り、妖怪にも組織があり家族もいるようだ。勿論、ひとりも例外ではないだろう。河童という組織に属し、家族もいるはずだ。

だが、彼女はそれについて話さなかった。つまり、話したくないのだろう。ならばあえて聞く必要もない。彼女が話してくれるまで待てばいい。

そう思うと俺はひとりのことを知らなすぎる。彼女は幻想郷のことはよく教えてくれるが自分のことは滅多に話さなかったな。

知っているのは彼女が河童であり、普通の河童より強くて変わり者だということくらいか。

「ぼやぼや考えても仕方ないか。とにかくひとりが起きる前に朝食でも作っておこうか」

そんな独り言を言いながら、着替えて、顔を洗い、台所へ向かった。

「朝は焼き魚に味噌汁といきたいとこだが、生憎味噌なんてもんはないからな。すまし汁で我慢だ」

だが、昨日の丸米茸があるおかげで汁物の質は上昇した。

それに魚もまだ干乾しした物がある。

「悪くないな」

俺は米を研ぎ、火をおこし、さらに米を炊きながらとなりの竈で湯を沸かしと作業を平行しながら飯を作る。

今では慣れたものだが、来たばっかりのときは苦労したものだ。

火のおこし方すらわからず、竈の使い方もわからない。

もちろん教えてくれる人なんていない。

四苦八苦しながら何とか使いこなそうとしていた。

自分が生きるために必死だったんだ。

だが、今は違う。
ひとりがいる。
彼女の優しさで俺は生かされている。
俺はそれに応えないといけない。
生きる目的ができた。

「うおっ」
気がついたら汁が煮詰まっていた。

「ひとり、起きろ。飯が出来たぞ」
ひとりはまだ気持ちよさそうに寝ているが飯が冷めたらいけないので起こす。
「ん、あぁ、悪いね。寝過ごしちまったみたいだ」
目を擦りながら眠そうに話すひとり。かわいい。
「構わない。着替えて顔を洗ってこいよ。飯が冷めないうちに食おう」

「先に食べてな。すぐいくよ」

　朝食を終え、雑談をしながら片付けをする。
「そう言えば、この家、やけに整理されてるね。それに物資、食料も安定してる。とてもあんた一人じゃできそうにないが、どういうからくりだい？」
「あぁ、この家の掃除とかは暇なときにその都度やってるんだ。食料に関してはお前の方がよく知ってるんじゃないか？ここって野菜や穀物が自生してるんだよ。ちょっと歩けばそこら中にある。川で魚も釣れる。それも大漁だ。幻想郷さまさまだよ」
「へぇ。盗みまでやってんのかい。よく今まで生きてこられたね」
「盗み？何言ってんだ。自生してるやつって言っただろ。人が育ててるやつは採ってない。あくまで里の管理外のやつだけだよ」
「そうだね。あんたの主張はわかるよ。人のは盗ってないってことだろ？」
「あぁ！そうだよ」
「馬鹿だね。まだ分かってないのかい。昨日話したことを思いだしな」
「昨日の？…あっ」

「そう。人のは盗ってない。では、妖怪のは？」
「妖怪も農業なんてするのか…」
「当たり前だよ。野菜はともかく穀物が自生してるなんてまずあり得ないよ。そういうものは管理されてるからね」
「まじかよ…」
「よく見つからず済んだものだよ。いくら野菜や穀物が妖怪にとって娯楽食だからといって殺されない例はないからね。それで、どこのを盗ってきたんだい？」
「湖あたりにはよく行ってたな。言われてみれば確かに自然に生えてるにしては手入れされてたような…」
「なるほど、よりにもよって山の奴らのものを盗っちまったのかい」
　通称　妖怪の山。そこには鬼を筆頭とした大きな組織がある。天狗や河童などの多数の妖怪がそこには所属している。
「なるほど。運がいいというわけでもなさそうだ。今までの言動や態度を見てみてあらかたあんたの能力がわかってきたよ」
「隠密系だな？昨日の話を聞けば嫌でもわかるさ」
　ひとりの話によると幻想郷の人間や妖怪には何か特別な能力があったりなかったりするらしい。

どうやら俺にはあるようだ。
「おそらく、だね。まだ正確にはわからないけどあらかたそんなものだろうさ。天狗の見張りを潜り抜けるなんてたいしたもんだよ」
山の見張りは白狼天狗と呼ばれる妖怪がしているらしい。
千里眼を持っていて、山に入ろうものなら即見つかってしまう。だが、どうやら俺は能力のおかげで見つからなかったようだ。
今まで、妖怪たちに見つからずに済んだのはこの能力のおかげみたいだ。ただ、ひとりやこの前の女妖怪には効いていない。おそらく、強い妖怪には効果がないのだろうか。
「ん？　待てよ、俺、あそこから米を盗ってるんだよな？　そしてあの山の頭は鬼…」
俺は重大なことをやらかしたかもしれない。
「はは、こりゃばれたら楽には死ねないねぇ。さすがのあたしも鬼とくりゃ厳しいもんだよ」
「そのときは俺を見捨ててくれ。巻き込むわけにはいかない」
「さぁ、そのときの気分しだいだね」
「いや、これは俺からのお願いだ。お前に迷惑をかけたくない」
「えらく強情じゃないか。まぁ、顔が割れてるわけじゃない。今後行かなかったらばれ

ることもないんだ。杞憂だよ」

「…そうだといいな」

ひとりのあの返答。俺の要求に対して触れず、論点をずらした。

俺が弱いからだ。

きっとひとりは助けに来てしまうだろう。

だめだ、そんなことをさせては。

なら、強くなるしかない。

「報告、麓の湖の底にて　柿祢（かきね）　様の死体を発見。周囲に争った形跡は無く、霊力も検知されておりません。よって巫女に祓われた可能性は低いです。別の場所で何者かに殺され、湖に遺棄されたのかと」

「で、その何者って誰？」
「現在調査中です。ただ、人間ではないことは確かです。資料によりますと人里の祓い屋に柿祢様を殺せるような人物はいません」
「人里以外の人間は？」
「それもないかと。こちらの資料によりますと、人里外に強力な人間を確認していません。総じて非力な人間です」
「それじゃあ私たちに喧嘩売ってきた馬鹿な妖怪がいるってこと？」
「はい。その可能性が高いです」
「高いっていうかそうでしょ。そうなるとある程度犯人は絞れてくるんじゃない？」
「はい。柿祢様を殺せるほどの実力者。この山外部に絞ればある程度目星がつくのですが…」
「なに？なにか問題でもあるわけ？」
「如何せん柿祢様の人柄です。その性格ゆえに恨みをもった内部犯の可能性が浮上しています」
「あぁ～たしかに～。あいつの性格終わってるからねー。そう考えると殺されても納得だわ」
「しかし…」

「わかってるわかってる。仲間内の殺しはご法度。どちらにしろケジメはつけさせないとね」

会話を終えると2匹の天狗はそれぞれ違う方向へと飛んでいった。

「何が彼女の琴線に触れたのか。彼が自分を受け入れたから?たったそれだけ?」

「なにかお悩みですか?　紫様」

「いえ、下らないことよ。それよりもあなたは早く修業をしなさい。あなたには尾を九つにしてもらわないと困るのよ。まだ、尾は六つ。他人のことを慮る暇があるなら自分のやるべきことをこなしなさい」

「はっ、失礼しました。では、行ってまいります」

自分の式が去ったのを確認すると、八雲　紫は大きなため息をついた。

「別に外であれば人間と妖怪が恋しようと構わない。本人たちが納得していればね。ただ、ここでそんなことされるとまずいのよ。それに異種同士のつがいで幸せになった組なんていない。その先に待っているのは子の迫害と自身の死。それも妖怪としての死。人間の夫ないし妻が死んだとき、妖怪の片割れは精神的に堪えられず、自身の死を望む。それは妖怪にとって存在の消滅と同義。残された子は全てを怨みながら寿命を終える可能性が高く、悪霊となって再び世を乱すこともありなん。そしてなにより」

紫はパチンと扇子を閉じる

「この郷での人間と妖怪の関係を崩壊させうる危険性がある」

空間を撫でるようになぞり、スキマを開く。

「せめて、時代が違えば、また違った結末があったのかもしれないわね」

第四話

「今日はちょいと用があってね。山に行かなくちゃならないんだ。悪いが1日一人で過ごしてもらわなきゃならないんだ」
「そうか。気をつけていってこい」
「いいかい。いくらあんたの能力があるからってフラフラと色々なとこに出歩くんじゃないよ。この前みたいに―」
「分かってる分かってる。用心するよ」
「それならいいけどさ」
　ひとりは下駄を履き、戸に手をかけると
「行ってくる」
　とこちらを向いて微笑んだ。
　それに俺は
「あぁ」
　としか返せなかった。

また、見惚れた。

気がつけばひとりはもういなかった。

どれくらいボケていたのだろうか。

顔を　パンッ　と叩き、気合いを入れる。

俺は強くなると決意した。そのためには―

鍛練

といっても具体的に何をすればよいのか…。

まぁ、とりあえず体を鍛えることから始めよう。

まずは、腹筋１００回、腕立て伏せ１００回、背筋１００回……

１０分後、そこには息を切らせながら倒れている雅の姿があった。

駄目だ。こんなの続けられん。

結局、合計で１００回にも満たずに雅の鍛練は終了した。

「ゴクゴクゴク…っはぁ！」

雅は桶に顔を突っ込み、そこから水を飲むというなんとも下品な飲み方をしていた。

「我ながらこんなに体力が無いとは…。継続は力なりと言えど時間がかかるのは好ましくない。どうすればよいのだろうか…」

じっ…と考え込み、しばらくするとおもむろに立ち上がった。
「とりあえず、休憩」
雅は家の縁側へ行き、そこへ寝転がり、昼寝を決め込もうとしていた。
「無理はいかんね、いかんいかん」
先日の決意むなしく、雅は睡魔の闇へと吸い込まれていった。

――カァカァカァカァ――
「ん、ふぁぁ。ちょいと寝過ぎたかな」
烏の鳴き声で目を覚ます。
既に日は傾いていた。
「ちょいとどころじゃないな…」
雅の胸に重石がのし掛かる。
「結局、俺なんて駄目な奴なんだよ。変わろうなんて無理な話だったんだ。所詮、俺は…」

「悩めるねぇ、若い若い。」
茶の間からひとりの声がした。
「ひとり!? 帰ってたのか！　それに今の…」
「別に、あたしはそのままでいいと思うけどねぇ。無理に変わろうとしなくても、あんたはあんたらしく生きていけばいい。それじゃあだめなのかい？」
「でも、俺は、強くならないと――！」
「ここで生きていけない、ってかい？」
違う！俺はひとりを――！
「ふふ、なに別にあんたが強く無くともあたしが守ってやればいいだけの話だ。あんたが無理して強くなる必要なんて無いんだよ。だからさ――――」

あぁ、やっぱり、ひとりは優しいなぁ

俺は俺でいいって

こんな俺を守ってくれるって

だから強くなる必要もないって

俺にとって、甘く優しい言葉を

その時、俺のどこかのネジが外れる音がした。

ひとりを、汚してはいけない。

ひとりを、悲しませてはいけない。

ひとりを、傷つけてはいけない。

ならば、どうすべきか。

ならば、

この魂を削ってでも
俺が強くなればいい

「ありがとう、ひとり。でも、俺は決めたんだ。強くなるって」

雅の目は煌めいていた。

その輝きは白き希望の光か、それとも――

「そうかい。それならあたしはもう何も言わないよ」

ひとりは納得したのか、やれやれという雰囲気を出しながら体を伸ばした。

この後、雅の身に何がおきるとも知らずに……。

翌日、鳥もまだ眠りについている刻、雅は一人、迷いの竹林と呼ばれる場所に来ていた。

そこで何をしているのかというと

「ふう、結構な量が採れそうだな」

筍を取りに来ていた。

「ここの筍、美味いんだよなぁ。下処理がちょいと面倒だけど」

―グルルル…―

雅から向かって南の方向から獣の唸り声が聞こえてきた。
以前の雅なら慌てて隠れようとしていたが、
「来るなら来い」
動じず、筍を取り続けた。
「アォーウ！」
「ギャン！ギャン！ギャン！」
狼と思われる獣たちが何かに気づいたようだ。
「チッ、仕方ねぇ。これくらい一人で殺らなきゃ、ひとりなんて守れねぇよ！」
雅は臨戦態勢をとったが、
「あれ？」
狼たちは雅とは全く別の方向へと駆けていった。

緊張の糸が解け、呆けているといきなり爆発音が耳に響いた。

「なんだ?」

音のする方へすぐさま振りかえり、再び臨戦態勢をとる。

そこには火の海が広がっていた。

「はは、なんだよこれ」

一瞬気が抜けたものの、すぐに気を張り直した。

気配を探らないと。なんでもいい。獣か、妖怪か、何かいるはずだ。

雅は自分でも驚くほど冷静だった。

先日まで死に怯え、震えていたのにも関わらず、この死ぬかもしれない状況で汗一つ、流していない。

―ジャリ…―

足音！これは…獣のものじゃない！なら妖怪か！

息を潜め、様子を伺う。

まずは敵の姿を確認しないと。逃げるかどうかはそれからだ。
雅が現在持っている武器といえるものは、スコップと護身用の短刀だ。
この短刀、押し付けられた家の蔵で初日で見つけ、今日までずっと身につけていたのだが、臆病な雅には使う度量はなかった。
だが、やはり今は違う。
死の恐怖は無論、殺すことにさえ躊躇なし。
あのとき外れたネジの1つはこれにあり。

―ジャリジャリジャリ―
足音はどんどん近づいてくる。
「まったく、鬱陶しい狼たちだな。こんなんじゃおちおち筍も採れやしない」

現れたのはモンペ姿の白髪少女だった。
そして、雅は思考をフル回転させる。

人間!?いや、こんな時間に幼い子が、ありえない。それにさっきの爆炎を見る限り、相当な手練れ。勝てるか?殺るなら一瞬。仕留め損なえば、死。危ない賭け。乗るべきでない。なら…

雅がとった行動は逃亡。判断は冷静そのものだった。
ただ、

―パキィ!―

周りが見えていなかった。竹を踏んづけてしまった。

しまった!
と思ったがもう遅い。

少女は音のした方へ無数の弾幕を放つ。

「くっ…」

雅はできるだけ体の丸めて面積を縮めながら、躱そうとするが

「ぐぁっ！」

やはりいくつかの弾をくらってしまう。

「くそったれ…死んでたまるか」

なおも取る行動は応戦ではなく逃亡。

正面から戦えば、勝ち目はないと判断したのだ。

しかし、雅の逃亡を少女が追うことは無かった。

そもそも彼女は雅がいたことすら気づいていないのである。

弾幕を放った後、

「気のせいだったかな」

とのんきに筍取りを再開していた。

命からがら、雅は筍の入った籠を抱え、家についた。

日はまだ昇っていない。
ひとりもまだ眠っている。
そのことに雅はホッとしていた。

こんな怪我して帰ってきたのを見つかった何を言われるか。それに、心配させたくないしな。
雅が負った傷は軽い火傷と切り傷に擦り傷。特に重い部分はなかった。
患部を水で冷やし、薬草を磨り潰し、塗った。
「これですぐに治るだろ」
「なにがさ」
雅が独り言を呟くとひとりがそれに答えた。
「あっ」
「怪我したのかい？」
ひとりが歩み寄り、雅を覗き込む。
「あ、あぁ、ちょっと料理に失敗してな」
「ふぅん。それにしては火の気がないが」
「すぐ消して処理したからな」

「怪我の治療より火の後始末かい？」
「あぁ、ちょっと気が動転してたんだ」
「それに火傷の仕方も独特だね。全身にかけて点々と」
「大きな火の粉が飛び散ったからな」
「傷も火傷だけじゃなく、裂傷が見られるね」
「そのとき包丁で切ったのかも」
「…どうしても、あたしに隠すのかい？」
「何言ってんだ。隠し事なんてないぞ」
「あたしは事なんて一言も言ってないが」
「それは、揚げ足取りだ。ひとり、いい加減してくれ」
「…どうしても心配なんだよ。昨日から様子が変だからね。あんたがもしかして―」
「いいから！大丈夫だから。ひとり、お前はなにも心配しなくていい。俺なんかほっとけばいいんだ」
　ひとりの言葉を遮り、雅は言い聞かせる。
　それはひとりになのか、それとも自分になのか。
　ひとりはそれを黙って聞いていた。

二人の間に朝日が差し込む。

その時、はっきりとひとりの顔が見えた。

悲しげで哀しげな顔。

やめてくれ。そんな顔しないでくれ。違うんだ。俺は―

「もし、さ。あたしが邪魔ならさ」

やめろ。それ以上言うな。俺はお前のことが―

「あたし、雅の元から去るよ」

閑話　それぞれの生い立ちと思い

俺は愛されぬ人間だった。
産まれてこの方、愛というものを受けてきた記憶はない。
親にせよ、友人せよ、与えられるのは上辺だけの優しさ。
いや、それすら極たまに、親切であろう人から受け取ったに過ぎない。
親はいつも弟と妹ばかり可愛がっていた。
俺が産まれた当初は可愛がっていてくれたのだろうか。
だが、物心ついたころには既に弟と妹が愛を授かり、俺はただ彼らの都合の良い兄となっていた。
友人に関しても特に友情を感じたことはない。
感じたとしても大抵それは裏切られ、偽とかす。
利用され、利用され、利用され尽くされた。
俺は彼らにとって気持ちの良いことができる人形だった。
俺はそれが嫌だった。
でも抵抗する強さもなければ勇気もなかった。

為すがまま、されるがまま、流されるがまま。
それで俺は　生きる　ということが分からなくなって
それで、それで―

目覚めたときには森にいた。
なぜその森にいるのか、自分に何が起こったのか、分からなかった。
とにかく家に帰ろうと、歩いて歩いて、森を抜けたとき、ある違和感を覚えた。

街が無い。

そこにはビルもコンビニも無かった。
あるのは歴史の教科書で見るような集落。
とりあえずここは何処かを聞こうと里へ入り、道行く人に尋ねる。
だが、同じだった。
あいつらと同じ目。
嫌悪と無興味が入り交じった心地の悪い目。
彼らは面倒くさそうに俺を長(おさ)の元へ連れていった。

ここらの人間を治める長は俺に里から三里ほど離れた家を与えてくれた。
その代わり、もう里へ頼るなという交換条件付きでだが。

人の温もりなんて無かった。

元の世界も。幻想郷にも。
在るのは己の利への果てしなき欲求。
”己”を形成できなかった俺は淘汰されるしかなかった。

生きる意味は知らない。
だけど、腹が減る。
怪我もする。
病気にも罹る。

苦しい。辛い。
もう生きていたくない。

でも死ぬのはもっと怖い。
何も成せず死ぬのは怖い。
何も知らず死ぬのは怖い。
自分が生きた意味も分からず死ぬのは怖い。

俺は、空っぽだ。

最初はただ適当にからかって怖がらせて、逃がすつもりだった。

でも、あいつはあたしの手を引き、あろうことか自宅へと招こうとした。
どんなに妖怪だと言っても信じず、歩いてはあたしの身を案じた。
振り払おうと思えば、いつでもできた。

でもあたしは、なぜか振り払うことができなかった。
家は人里からほど遠い場所にあった。
聞けばそいつは他人から疎まれ、差別されているらしい。

あたしと同じだった。
仲間から奇異の目で見られ、人間はおろか同族にさえ疎まれ半ば外れ妖怪として生きているあたしと重なって見えた。
どうしても妖怪だと信じないので、飯の途中にあたしの皿を見せた。
そいつは態度を一変させ、怯えながら喰うのかと尋ねてきた。

妖怪は恐怖さえされていれば生きていける。
人間の恐怖こそがあたしたちにとっての食事。
味覚を味わうものは全て娯楽食。
あたしに人を喰う趣味はない。
喰わないが、あたしは人間も妖怪も気に入らないやつは潰してきた。
けど、この人間は殺す気にはなれなかった。

去る直前、そいつはあたしの名を聞いてきた。
もう会うこともないだろうから餞別として教えてやった。

『ひとり』

いつもひとりぼっちでいるあたしを妖怪たちはそう呼び始めた。
親には名付けられなかった。
母はあたしを産んで死んだ。
いや、正確にはあたしが喰い殺した。
母の腹を喰い破り、母の妖力を、生命力を取り込んで産まれた忌み子。
父は生まれたてのあたしを殺そうとしたが、逆にあたしが父を消滅させた。
その事実は河童だけでなく、周辺の妖怪全てを震撼させた。
腕に自信があるやつ
あたしの存在が気に入らないやつ
恨みを持ってるやつ
皆あたしに向かってきたが悉く捻り潰した。
気がつけばあたしはその地域の頭となっていた。

それからあたしの周りに媚びを売る者、寝首を掻こうとする者、忌み嫌い関わろうとすらしない者が溢れた。
気分が悪かった。悪意しかないその場所に一秒たりとも居たくなかった。
あたしはある妖怪のすすめでこの幻想郷と呼ばれる場所に住むことにした。
そこは以前の場所よりいくらかはましだったが、それでもあたしの存在を受け入れてくれる者はいなかった。
結局、あたしはひとりぼっちのままだった。

二人が出会ってしまったのは偶然か、必然か。
しかし、二人が惹かれ合うのは当然の結果
たとえそれが道理から外れていても

触れた温もりだけは間違いない

人だからではなく、妖怪だからでもない

彼だから

彼女だから

この想いだけは信じたい

だが、所詮は陽に生きる人間と陰に生きる妖怪

葉は華を惟(おも)ひ、華は葉を惟ふ

互いに合いまみえるはずのない両者がどうして互いのことを理解できようか

たとえ交えたとしても
後に待つは悲しき結末
ならばせめてこの一時は
甘美な夢に溺れてしまえ

第五話

「止めろ！」
雅は思い切りひとりの両腕を掴んだ。
「嘘でもそんなこと言わないでくれ！」
必死だった。みっともないほどの懇願だった。
まるで闇を照らす光が消えてしまうのを拒むような—
ひとりは、雅の歪む顔に手を添えた。
そして、そっと頬に口づけをする。
「大丈夫。雅が望む限り、あたしはいつまでもそばにいるよ」
あぁ、あああ。

分かっていた。

気づかないふりをしていた。

まだ、見ないふりをしていたかった。

まだ、今の俺じゃふさわしくないから。

たとえ、ひとりが良くても

俺が納得できないから

まだ、ひとりが俺のことを好きでないと思いたかった

でも、今の言動で全てが打ち崩された

俺は強くなりたかった

ひとりと付き合うために

でも、その必要は無くなった

目的はなくなった

俺は弱いままでよくなった

それでいいのか？

それでいい

と弱い俺が囁く

「いや、だめだ。だめなんだ。弱いままの俺じゃあ」

「あたしは、弱くてもあんたのことが―」

好　き　だ　よ

もう、抗えなかった

あの強いと思われた意志は吹き飛ばされた

雅は自分の腕が折れるほどの力でひとりを抱きしめる。

「俺も、俺もひとりが好きだ！好きで好きでたまらない！」

「あぁ、これが想い合うってことなんだね。とても、とっても心地よいものだねぇ」

ひとりも雅を抱きしめ返す。

そして、二人は唇を重ねた。

「あぁ、なんて、なんて憐れなのかしら」
　二人の愛の空間にスキマが生じる。
「八雲、今回は見逃してやるから、とっとと消えな」
「それは本当に愛？どこが愛する理由になったの？自分を疎まず受け入れたから？たったそれだけ？」
「黙れ。あんたには理解できないだろうよ」
「受け入れてくれるなら誰でもよかった。別に彼でなくても、自分を受け入れてくれるのなら」
「黙れ！受け入れようともしなかったあんたが知った風な口を利くな！」

「私は受け入れようとしたわ。それに山の河童たちも他の妖怪たちも貴女の存在を疎ましいとは思っていないわ。ではなぜあなたは受け入れられなかったと感じるのか」
「黙れ！黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ！」
「それは貴女が私たちを受け入れようとしなかったから。自らの殻に籠り、関係を造ることを拒絶したから。」
「黙レェ！」
　それは異形の声だった。
　凄まじい殺気が紫へ向けられる。
　それは対象者ではない雅でさえ、震えあがるようなものだった。
「図星。怖かったのね、他者と関わることが」
「ガァァァァァ！」
　怒り狂ったひとりは巨大な弾を紫に向けて無数に飛ばした。
「少し、頭を冷やしてなさい」
　紫は弾幕をかき消し、ひとりを何処かへ飛ばした。
「ひとり！」
「どうも、人間さん。あなたにも問うわ」
「ひとりをどこへやった！」

「なぜ貴方はひとりのことが好きなったの？」
「俺の質問に答えろ！」
雅は殴りかかろうとするが、それよりも速く紫のスキマが手足を拘束する。
「この場の主導権を握っているのは私。質問に答えるのは貴方よ」
「糞！…他人を好きになるのに理由なんているかよ！それにあったとしてもお前には理解できない。俺の気持ちもひとりの気持ちも」
「えぇ、本当に解せない。論理的な生き方ではないわね。感情的で、刹那的で、愚かな生き方」
「人間なんて皆そうだろ」
「貴方の物差で人間を総括的に語らないで。これは貴方個人に対しての意見よ」
「…なんでこんなことすんだよ」
「そうね、端的に言えば貴方とひとりとこの幻想郷のためね。貴方も分かっているんじゃない？自分たちがしていることが間違っていることを」
「それでも！俺はひとりのことが―」
「本当に彼女のことを考えるのであれば、尚更貴方は身を引くべきだわ。貴方と結ばれることによって、ひとりは妖怪としての寿命を大幅に縮めるのよ」
「……」

「貴方が幻想郷に居ると、彼女はいつまでも貴方のことを引きずってしまう。だから、貴方にはここから出ていってもらうわ」
「……」
「異論ないわね。せめて、この幻想郷がもっと不安定で曖昧な世界であったなら、また違ったのかもしれないわね。…さようなら」

紫は扇子を雅の方へ向ける。

「飛ぶよ！しっかり掴まりな！」
いきなりひとりが超速で現れ、雅を抱え、跳躍する。
二人が居た場所にはスキマが展開されていた。
「ひとり…」
「なにをぼやぼや考えてんだい？あたしはあんたと過ごす未来しか考えられないよ」
「お荷物抱えて、私に勝てるのかしら」
「なに、あんたにはちょうどいいハンデだ」

ひとりの腕の中、雅は唇を噛み締める。

ひとりは、覚悟できてるのに。俺は―

雅は動かない。

みっともなくとも、それが今取る最善の行動だからだ。

紫が次々と攻撃を仕掛けるがひとりはそれを全て往なす。

スキマを張られようと、躱し

弾幕を飛ばされようと、弾き

結界を張られようと、砕いた。

しかし、着実にひとりの体力は削れていった。

「防戦一方ね。あとは時間の問題。考えは変わらないかしら？」
「はぁ、はぁ、まだまだ余裕だよ。あんたこそ、死に際の言葉を考えとくんだね」
「そう。なら、一度死んでもらうわ」

《紫奥義・弾幕結界》

無数の弾幕が二人を覆う。
逃げ場はない。
「くっ」
ひとりは雅を庇うように上から覆い被さる。
「ひとり！」
「あんただけは死なせないよ」

次の瞬間、一気に弾幕が着弾する。
「ぐあああああああ！」
「ぐう、ひとり、もういい！離せ！俺のことはいいから逃げろ！」
「あたしは、死なせない。やっと、命を、共に、できる、ひ、と、に……」

弾幕が止んだ。
煙が晴れ、そこには二人の跡すらなかった。

「人の気配は無し」
紫は扇子を閉じる。
「私、あなたのこと結構気に入ってたのよ。残念だけど、またいつか会いましょう」
「もう会えねぇよ」
「な―」

雅が短刀を紫の喉目掛けて振るう。
―ブシュッ―
紫は躱しきれず、その刃を直にくらう。
「ガハッッ」
間髪入れず、雅は紫の胸を刺す。
―ズシュッ―
さらに短刀で体を切り刻む。

―ザシュッ、ザシュッ、ザシュッ―
それは原型が生物だとわからない形になるまで続いた。
「はぁ、はぁ、はぁ、ひとり…」
雅の後ろで倒れるひとりの方はまだ辛うじて生物の形を保っていた。
「ひとり、ひとりひとりひとり。ごめんよ、俺のせいで。俺が弱かったから」
ひとりの体を抱きしめ、涙を流しながら謝り続ける。

―トクン、トクン、トクン、トクン―
血の流れる音
脈の音
生命の音

ひとりはまだ生きている!!!!

雅は手首を切り、流れ出る血をひとりの口元へ運んだ。

「妖怪なら!人間の血を飲めば!少しは――!」

しかし、ひとりの容態が良くなる様子はない。

ひとしきり血を与え、雅は効果がないことを悟る。

「糞!ひとり、死ぬな!死なないでくれ!」

雅は必死に呼び掛けた。そして願った。

どうか死なないでくれ、と。

「…う」

その願いが届いたのか、ひとりが反応した。

「ひとり！」
「うぁ、ま、さ、ぶ、じ、か、い、？」
「あぁ、俺は大丈夫だ！ひとり、死ぬな！」
「ゆ、か、り、は、？」
「俺が切り刻んでやったよ。もう生きてはないさ」
「ば、か。あ、い、つ、は、そ、れ、く、ら、い、じ、ゃ、し、な、な、い」
「―っ！」
　雅は紫であった肉塊の方へ振り向く。
　だが、それらが動く気配はない。
　しかし、雅は
「そうか、それじゃこのままここにいたらまずいな。どこかへ逃げないと」
「だ、め、だ。や、つ、は、ど、こ、へ、で、も」
「大丈夫。俺にあてがある」
　雅はひとりを抱える。
　そして背負い籠に必需品を入れ、家を去った。
「ど、こ、へ、？」
「竹林さ。迷いの竹林」

雅たちが去って数刻ほどたった後、紫であった肉塊は不思議と手をつけられていなかった。

そして、そこに六つの尾持った女性が現れる。

「おいたわしや、紫様。あなた様ほどの御方がこのような無慙(むざん)な姿に」

「藍、御託はいいから。さっさとしてちょうだい」

隣にいる霊魂に急かされ、藍と呼ばれる女性は肉塊に妖力を込め、肉体を紡ぎ始める。

「それくらいでいいわ。あとは自分でやるから」

肉塊が人の形を取り始めたころ、霊魂がそれに入る。

それはみるみる内に紫の姿へと変わっていった。

「ふぅ。私としたことがぬかったわ」

「おぉ、紫様。よくぞ戻られました」

「持つべきものは式ね。私ひとりじゃ彼岸から帰れても肉体の復元に手間取ってたわ」

「やはり、ひとりという河童はそれほど…」
「いえ、彼女も厄介だけれど、問題なのはあの人間。彼奴は私に気づかれることなく、背後を取った」
「なんと…！」
「あの能力、非常に厄介ね。これからの捜索にも骨が折れるわ」
「一度、手を引かれては？」
「いえ、それはだめよ。これは私の自尊心の問題ではなく、この幻想郷にとっての問題。後回しにはできないわ」
「御意。ではこの私も―」
「あなたはやるべきことをやりなさい。同じことを言わせないで」
「はっ、失礼しました」
「とりあえず、一度帰って立て直しましょうか」

一方、雅たちは竹林へ着き、体の休まる場所を探していた。

「ひとり、大丈夫か？」
「ああ、だいぶ、ましに、なって、きたよ」
「そうか。…どこか、休まる場所は無いのか…」
「おい、おい、あてが、あったんじゃ、ないのかい？」
「隠れるにはうってつけだと思ったんだが…」
「はは、それに、関して、は、いい線、いってるよ」
「だろ？あとは家さえ見つかれば…」

雅が探し回ること数十分、なんと運良く打ち捨てられた小屋を見つけた。
「あった。あったぞひとり！少し汚いがあそこで休もう！」
「あぁ、無いより、ましだ、ね」
雅は嬉々として小屋に入り、ひとりを寝かせた。
「いやー、なんにせよ休める場所が見つかってよかった」
雅は嬉しそうにひとりの治療を始める。
治療といっても、薬草を塗ったり、飲ませたりしてるだけだが。
「なぁ、まさ、ここって、ひとが」

ひとりが何か言いかけていたがその前に、小屋の戸が開いた。
「おい、お前ら人の家で勝手に何やってんだ？」
「！」
小屋の持ち主であろう人物。
それは雅が早朝に見た白髪の少女であった。

第六話

「人の家で勝手に何をやってんだ？」
　こいつは朝の！まずい！まさかここに住んでたなんて！
「おおげんか、しちまって、ね。すぐに、でていくから、すこしだけ、やすませてくれ」
「嫌だ、と言ったら？」
「は、は、そりゃ、こまるね」
「頼む！少しの間だけでいいんだ！ひとりの怪我の処置だけでもさせてくれ！」
　雅は土下座をし、必死に懇願する。
「…別に好きにやれば？私は寝床さえあれば困らないし」
「ありがとう！ありがとう！」
　雅は感激のあまり、立ち上がり、少女の手を握り上下に振った。
「っ！」
　少女は顔を歪め、雅の手を振り払う。
「あっ、すまない。興奮し過ぎた」

「夜には出ていってくれよ」
「ああ、おんに、きるよ」
　少女は自分は外へ出ると言い、家から出た。
「助かった」
「そうだね、話の、わかるやつで、よかった」
「あぁ、それにひとりの傷も治ってきてる。よかった。あのときはもうダメかと思った」
「ふふ、妖怪はあれくらいで、死なないよ。まぁ、でもこっぱみじんにされたら、流石に死んでたけどね」
　妖怪の死とは存在の消滅。
　だが、肉体的な死も勿論ある。
　ただ、それは人間の死とはまったく違う。
　人間が死ねば、閻魔に裁かれ、地獄に行って刑務をこなすか冥界で次の転生を待つかをして、最終的に魂が浄化され新たな生を受けることとなる。
　妖怪の場合、生前の罪を裁かれるのは人間と同じ。
　その後、お勤めを終えて此岸へ還るとき、その魂は生前のものとまったく同じなのである。
　それは恐怖から生まれたものだから。

口伝、風土、噂、伝承、そこから生まれる彼らはそれ自体が魂の源。
つまり、源泉が同じであれば取れる水も同じであるように彼らの魂もまた、同じなのである。
逆に言えば源泉が枯れれば彼らもまた消滅する。
それが、妖怪のとっての　死　だ。
その源泉が枯れぬよう、妖怪は種として組織を作るのだ。
だが、その肉体的な死から、現世に戻るまでにかかる年月は時によって人の寿命を軽く越える。
つまり、どちらにしても片方の死はもう片方の死に繋がるということになる。
「もうあんなことはするな」
「気分、しだいさ」
「お前が死んだら、俺も死ぬ」
「ばか、あたしとまさ、とじゃあ地獄に、行くにしても、人間と、妖怪で別れるから、無理だよ」
「珍しく弱気だな。らしくないぜ」
「それほど、監視の目がキツいんだよ、あの世は」
「八雲　紫よりもか？」

「あれと比べたら、八雲なんてガキのお遊びみたいなもんだ」
「そんなにも差があるのか」
「あぁ、それが神と妖怪の差ってもんさ」
「神と妖怪……そんなことより、大分良くなってきたんじゃないか」
「あぁ、かなり回復したよ。全快まであと半刻もかからないね」
「あんなに重症だったのに、流石だな」
「あぁ、妖怪だからさ。こんな力、いらないと思ってたが、ときには役に立つね」
「ひとり…俺は『ひとり』が『ひとり』でよかった。本当にそう思う。誰が、なんと言おうとも」
「雅…」
　二人は見つめ合い、そして抱きしめあった。

「かぁー、なんだいあれは、南蛮の菓子より甘ったるくて見てるこっちが胃もたれしてきた」
　額に手を当てながら呆れているのは家主である白髪の少女。

彼女は、外へ出ていくと言いつつ、壁の隙間から二人の様子を見ていた。
「人間と妖怪が事ありげに家に乗り込んで来たから、興味本位で居させてみたけど、まさか本当に恋人なんてね。今まで何度かお目にかけたことがあるが、大抵人間が喰われて終わりだ。多分、こいつらも男の方が喰われておしまいか」
少女は　やれやれ　と、ため息を吐く。
「あぁ、年取ると、独り言が多くなってやだね」
毛先を指で弄びながら、少女は竹林の奥へと消えていった。

「楓(かえで)、本当にここで間違いないの？」

「はい、かの匂いはこの場所に境に途絶えてます」
「ということは、柿祢殺しの犯人は既に死んだってこと？」
「はい。おそらく間違いないかと」
「はぁ～つまらないわぁ。せっかくいい運動ができると思ったのに」

「仕方ありません。報告に……む？」
「ん？どうしたの？」
「これは、人間の匂い？」
「どうせ、そいつが喰った残り香でしょ」
「いえ、死臭はしません。それに匂いは一つだけです」
「へぇ、なにそれ、人間と妖怪が一緒に住んでたってこと？すごく面白そうじゃない！いい記事になるわ！」
「【天狗通信】のことですか？花燭（かりん）様も物好きですね。あんな通俗なものを嗜まれるなんて」
「まだまだ楓も青い青い。この世の中、楽しいことや面白いことで満ち溢れてるの。そんなの骨の髄まで楽しまなきゃ損でしょ」
「はぁ、理解しかねますが私自身もその人間から情報を得たいと思います」

「決まりね。追うわよ、その人間」

「追跡はお任せください。人間は大好物なので」

酉の刻

ひとりの容態はかなり前に回復したが、大事を取り日暮れギリギリまで休んでいた。

「そろそろ出ようか、もうすぐ夜だ」

「そうだな」

「おや、もういいのか？」

二人が支度をしていると、いつの間にか帰ってきたのか少女が尋ねてきた。

「あぁ、いきなり入ってすまなかった。それに礼もできそうになくて申し訳ない」

「礼ならあたしがひとつ情報をやるよ」

「へぇ、それはありがたいね。是非とも教えてもらいたいもんだ」

「次の満月の刻、竹林の天を映す場所にて探し人見つからん」

「……それは信用していいのか？」

「さぁ、それはあんた次第さ。あたしも詳しいことは知らないし、真偽もわからない」

「そうか、参考にするよ」
「とにかく、ありがとう。えっと、」
「私の名は妹紅。これも何かの縁だ。次会った時は酒でも呑もう」
「あぁ、じゃあまたな」
妹紅は二人を見送る。
手を振る内に、二人は闇夜に溶け、消えた。

「探し人、か。ようやく、ようやく会えるな。輝夜!!!」

妹紅は燻っていた。
文字通り、身体から煙を吹き出しながら―

「ふむ、目的は近いですよ。花櫚様」
「さすが楓ね。この竹林、他の子なら目を回すのに」
「他の有象無象と一緒にしないでください。能力だけにかまけた子犬共とは格が違いま

す」
「その自信過剰なとこも好みよ」
「む、花櫚様。どうやら、人間と供に例の妖怪の匂いがします」
「ほんと、貴女を部下にして良かったとつくづく思うわ。ね、そう思わない？お二人さん」
花櫚という天狗がそう言うと同時に辺りの竹は全て吹き飛ばされた。
正確には切り飛ばされた
「おお、特種発見♪」
「私情は挟まないでくださいよ。まずは、妖怪の身柄の確保。そして、山への引き渡し。人間の方は…私がいただきます。話は押送中に妖怪の方からにでも聞いてください」
「しょうがない。可愛い部下の言うとおりにしましょうかね」

「糞！なんでバレた！」
「落ち着きな、雅。冷静に対処するよ」

「さてさて♪さっさと捕まえて取材♪取材♪」
「久々の人間。味わって食べないと…」

空に浮かぶは三日月。
それは雅とひとり、二人の運命を嘲笑っているかのように見えた。

第七話

月夜に淡く照らされる竹林
そこには二匹の天狗と人妖のつがい。
決して話し合おうなどという雰囲気はなく、辺りは殺気で満ちていた。
「そこの妖怪、おとなしく投降するならば今は殺しはしない。少し話を聞かせてもらうだけだ」
白狼天狗の楓が剣を向け、忠告をする。
「ん？もしかして貴女、『ひとり』かしら？」
だが、花櫚の方は何かに気づいたのか名を尋ねた。
「そうだ。と言ったら？」
「ひとり。というとあれがあの【鬼殺し】のひとりですか？」
「鬼殺し…」
物騒な異名に雅は少々気が引けた。
「ふん。事実が歪曲されて噂が一人歩きしてるだけさ。それで、聞きたい話ってなんだい？わざわざあの花櫚様までおいでなさってさ」

「先日の集会でお前も聞いたと思うが、十四天の内の一人が何者かに殺された」
「ああ、そうみたいだね」
「その容疑がお前にかかっている」
「はぁ？なんだいそりゃ。全く覚えが無いんだが」
「でもね、犯人と思われる者の匂いの近くにあった人間の匂いを追跡してたら貴女のところへ来たの。その容疑者の匂いも貴女と一致。悪いけど、一度山まで同行してもらうわよ」
「ひとり、どうする？」
「嫌だ、というわけにもいかなさそうだ。同行するよ。ただし、条件がある」
「何かしら？大体想像はつくけど」
「それなら話は早い。もちろん、あたしの隣にいる人間も一緒に同行させることだ」
「貴様！神聖なる御山に汚らわしい人間を入れろというのか！」
「なら、あたしは行かないよ」
「別に私は構わないけど、他の連中が許すわけないよねぇ。特にあの堅物は余計にね」
「仕方ない。強制連行する」
「いいよ、かかってきな。雅、あんたは安全なとこで隠れてな。…雅？」
　ひとりは雅の方へ向いたが、そこに雅の姿は無かった。

「あは、どうやら見捨てられたようね」
「雅、まさかあんた…」
「所詮、人間とはそういうものだ。結局、己の身が一番かわいブブフッ」

楓の喉から発するものは途中から言葉ではなく、血の泡と飛沫になった。そして、その喉からは短刀が生えている。
「楓!?」
「全く、なんであたしより血気盛んなんだい」

花櫚は理解できなかった。
この攻撃は十中八九あの人間の仕業だ。
それはわかる。
だけど、楓は白狼天狗のエリートだ。
その攻撃方法から見て、接近攻撃に彼女が気づかぬはずがない。
そしてなにより

人間の姿がみえない

短刀は楓の喉からは擦り抜け、再び姿を消した。

花櫚は恐怖した。

恐怖!?

この私が!?十四天であるこの私が人間ごときに恐怖したというの!?

だが、そこからの判断の早さは凄まじかった。

楓を抱えての撤退。

その速さはまさに韋駄天のごときものだった。

「ちっ、さすがに速すぎる。仕留め損なった」

「雅、これであたしたち本格的に山の連中のおたずね者さ」

「あっ、もしかして不味かったか?」

「そうだね。白狼の方はともかく、上司の方はまだ交渉の余地はあったろうね」

「すまない。俺が痕跡を残したから、尻拭いくらいは、と思って焦ったみたいだ」

「終わったことは仕方ないさ。それに、どうせ山に行ったとしても結局罪人として処理されてただろうしね」
「…ありがとう」

ひとりの優しさ。
底無しの沼のようだ。
気がつけば、その優しさに溺れてしまいそうになる。
また、俺はひとりの優しさに甘えたんだ。

「そんな顔、しないでおくれ。あたしは全然きにしてないからさ。逆にそうやって自責されるほうがあたしは嫌だよ」
ひとりの悲しそうな顔。
また、俺は―

そうして雅はまた自己嫌悪へと至る。
それはまるで一種の永久機関であるかのように
グルグル、グルグルと…

「まさか、人間の方が脅威になるとは…」
「う、か、りん、さま、ぁ…」
「まだ、喋っちゃだめ。一応、薬は塗ったけど傷は深いわ」
「すみ、ません、ぁ、たし、の、せい、で」
「喋っちゃだめだって。それにこれは楓のせいじゃない。あの局面は私でも避けられなかった。油断してたってのもあるけどね」
「ぁの、にん、げ、ん、まったく、匂い、が」
「もう！これ以上喋ったら気絶させるわよ！」

花櫚の一喝に楓は、コクン　と頷いた。

「ひとりが謀反、か。それは面倒ね。…いや、彼女はあの時点でこちらに手を出してな

かった。それに、実際に危害を加えたのはあの人間」
花櫚はある仮説を思い付いていた。
もしかして、ひとりの敵対もあの攻撃もあの男の能力なのでは。
そしてその能力は

”洗脳”

他の者と関わることに拒否反応を示すひとりが、あそこまで、まして人間になんて入れ込むはずがない。
そしてあの不可解な攻撃も自分たちの脳信号を弄って認識を阻害させていたのなら納得は行く。
もし、あのままあそこにいたら、私たちもひとりと同じように洗脳されていたかもしれない。
あの一瞬で花櫚は状況をそう捉え、逃亡という選択をした。
「痕跡を残したのはわざと。私たちは罠にまんまと嵌まった、ってわけか…」
おそらく、柿祢殺しは起爆剤

きっと、調査に来た者たちをこうやっておびき寄せ、ひとりで注意を引き、その隙をついて致命的な部分に攻撃を加え、行動不能にして、その与えた怪我の治療をしながらもじっくりと洗脳を進めるんだ。

その考えに花櫚は思わず身震いした。

「あの会話も、恋人の振りも、洗脳を偽装するため。でも、その点に関しては誤った。恋人というには一番ありえない奴を選んでしまった」

同族ともまともに付き合えないひとりが他種族おろか人間となんてわかりあえるはずがないもの。

「でも、これで点が繋がって線となったわね」

あの人間の目的はおそらく山の乗っ取り。

山の利権を人間のものとしようとする企みなんだろう。

「あの人間さえ潰せば、ひとりも元通り。とにかく、上へ報告ね」

そうして花櫚は楓を抱えたまま、山の頂上にある屋敷へと入っていった。

第八話

「報告ー！ただいま、花櫚殿が重症者を連れ、本部へと帰還しました！」
「なに？早急にここへ通せ」
下級の鬼の報告を聞き、鬼の四天王と称される虎金（こがね）は耳を疑った。
花櫚は私が目をかけている優秀な部下だ。そこらの妖怪程度に下手を打つはずがない
そう思いながら、花櫚が部屋へ来るのを待った。
「失礼します」
秒も待たない内に花櫚が部屋へと入ってくる。
「やけに静かではないか。いつもの態度はどうした？」
「こちらも可愛いがってる部下を傷つけられたもので、そう道楽的にはいられないのですよ」
「ほう、お前ほどの者がてこずるとは、相手の妖怪は誰だ？八雲か？神か？近異界の大妖どもか？」
「いえ、そのどれでもありません。しかし、敵は人間です。しかも、其奴は柿祢殺しの犯

人でありました。」
「人間だと？それでは犯人は巫女だったのか？」
「いえ、巫女ではない、男の人間です」
　花櫚が質問に答えると部屋の空気が一気に張りつめる。
「そいつは、強い霊力を持つ人間か？」
「いえ、奴からそのような力を感じることはありませんでした。しかし、奴は私が恐怖を感じるほどの能力を持っていると思われます」
「お前が恐怖を感じるほどの、か。その能力とは何だ」
「私が推測したところ、奴は他の者を”洗脳”させる能力を持っています。その能力により、奴は河童の”ひとり”を手中に収めています」
「洗脳だと？それにひとりだと？あ奴が人間の手に？」
「はい。私も部下も奴を他愛もない人間だと侮っていました。その結果がこれです。なんなりと処罰を」
　花櫚はまるで罰を受けることを前提に首を下げる。
「よい。頭を上げよ。逆によくぞ無事で帰ったと褒めてやる」
「しかし、これでは私の面目が！」
「私がよいと言ったのだ。それでこの件は不問だ。報告は以上か？」

「…はい」
「もう下がれ。部下の顔でも見に行ってやるがよい」
「はっ。この花櫚、あなた様にきっとこの身を尽くすでしょう」
「ははは。その言葉、もう何百万回も聞いたわ」
「改めて、ですよ。それでは失敬」
花櫚は風のように去っていった。

「ふぅむ。他の者を洗脳する人間に、かのひとり、並の妖怪では太刀打ちできぬか」

顎に手を当て、しばしの間、何かを考え込む。
「これは私が行くべきか? いや、ひとりの相手をしてる間に人間に洗脳されてしまっては元も子もない。だからといって、適当な部下を連れていっても相手の戦力次第では足手まといになる。……気に食わぬが、茨木に相談するか」
茨木という者に相談することに心底嫌そうな顔をしながら、虎金はその者がいる所へ向かった。

「茨木、いるか？」
　虎金は茨木の部屋へ入るが、その姿は見えない。
「あ、虎金様。ただいま茨木様は外に出ておられております」
　中には使いの者しかいなかった。
「はぁ～～、なんと間の悪い」
　額に手を当て、虎金は溜め息を吐く。
「何か御用でございましたら、伝えておきますが？」
「例の天狗殺しの犯人が割れた。それについて相談があるから私の部屋へ来るように伝えておいてくれ」
「なんと！例の事件の犯人が！…分かりました。そのように伝えておきます」
「あぁ、できるだけ早く来るように頼むよ」
「はっ！」

丑三つ時。
草木も眠り、妖怪たちがもっとも活発になる刻、雅とひとりは家を造っていた。

「ひとり、竹はまだいるか？」
「あぁ、まだもう少し必要だね。あと数十本は欲しい所だ」
その家は竹造り。幸い、材料には困らない。
しかもその建築の速さは土蜘蛛も目を見張るものだった。
「驚いたよ、ひとり。まさか、こんなに速く家を造れるなんて」
「へへ、器用だろ？」
「器用ってレベルじゃないな。夜明けには完成するんじゃないか？」
「ふふ、舐めてもらっちゃ困るよ。目標は暁までに完成だ。ほら、あんたも早く材料取ってきな」
「あぁ、行ってくる」
そうして本当に暁までに家は完成した。
「家具は追々調達するとして、まずは一寝入りだ」

「ほら、これ使いな」
そう言って、ひとりは雅に竹の枕を渡した。
「ありがとう。用意がいいな」
「当たり前だろ？あたしを誰だと思ってるんだい」
「河童のひとり、だろ？」
「そうさ。あたしはひとり。あんたに呼んでもらえたことでそれがようやくあたしの名となった。あたしをひとりにしてくれて、ありがとう、雅」
ひとりは心の底から満面の笑みを浮かべた。

あぁ、この笑顔見るために俺はここへ導かれたんだ。神が、今まで辛い人生を送った俺に褒美を与えたんだ。
雅は再び、そしてより深く、ひとりへと心酔していく。

それはまた、ひとりも同じことだろう。

どちらの想いが深いとか、強いとか、そのようなことはもはや関係ない。
彼らの世界には彼らしかいない。

先刻、友となった妹紅など、思考の片隅、世界の外側。
もし、彼女が二人の関係を絶とうとするならば二人は容赦なく彼女を排除しようとするだろう。
関係というものを、彼らは0と1とでしか考えない。
元来、関係とはそう単純なものでなく、幾重もの事柄が複雑に絡み合って成り立っているものだ。
しかし、彼らは違う。
彼らとって、味方は受け入れてくれる者であり、敵はそうでない者。
既に彼らの世界は完成している。
そこには誰も入る隙はない。
彼女が彼の存在意義であり、彼が彼女の存在意義。
両者たり得るのは、共に両者たるため。
それ以上必要ない。
他の者に許されるのは外からそれを眺めるか、無視するか、だ。
何人たりともその世界を侵すことは許されない。
狭い狭い世界の中で、彼らは生きている。
なぜなら、それしかないから。

ようやく見つけた”生きる”ということ。
長年、求め、手にした”それ”を

否定されたくない

井の中の河童と人は、大海があることを知れども、知ろうとせず。
井の中で、共に幸せを享受する。

これを正常と見るか、それとも異様と見るか。

少なくとも彼らが
歪んでしまっていることに
純粋であることに
間違いはない。

第九話

一連の騒動から夜が明け、各々の行動は進むもの、滞るものに別れた。
その中でも八雲　紫は暖かな布団でぐっすりと寝ていた。
早急な対応が必要なのは彼女も理解している。
だが、それ以上に先日で力を使ってしまっていた。
今の体力では目的の者たちへ向かったとしても返り討ちにされてしまうという判断だった。
しかし、ただ寝ているだけの彼女ではない。
彼女は知己に彼の者たちの捜索を依頼して、床についた。
彼女ほどの慧知ならばきっと見つけることができるはず
そう期待し、ふわふわの羽毛布団にくるまり、眠りについた。

「まったく、なぜ私がこんなことを…」
妖怪の山本部の屋敷の一部屋で頭を抱える鬼が一匹。
彼女こそ”山の賢者”こと茨木華扇。
彼女は鬼でありながらも、徳を積み、上位の存在へと目指す変わり者であった。
ただ、その彼女でさえも解らぬものはある。
その中でも特に頭を悩ますのは友人？の八雲　紫である。
今まで多くの妖怪と出会い、粗方の種族やそれらの性格の傾向や属性を理解してきたという自負は華扇にはあった。
しかし、八雲　紫だけは自分の知識の中では当てはまらない。
掴みどころがなく、どこかふわふわとしながらもしっかりとした芯がある。つまるところ、考えが読めない。
そして今回のこともそう。
いきなり式をよこしたと思ったら人妖の捜索を頼んできた。
「私が探すよりも自分で探す方が早いでしょうに…」
八雲にやきもきしながら、菓子を頬張る。
「茨木様、虎金様より伝言を仰せつかりました」
「なにかしら？」

「例の天狗殺しのことについて犯人が割れたそうです。そのことについて茨木様に相談したいとのことです」
「どいつもこいつも、私を便利屋とでも思い込んでいるのかしら」
と文句を言いつつも結局引き受けてしまうのが彼女の性なのだろう。

「虎金、来たわよ」
華扇が呼び掛けると自然と戸が開いた。
「応。やっと来たか」
「相談したいことって何かしら？」
「まぁ座れや。おい、茶と菓子を出してくれ。甘いやつだ」
虎金は部下に茶を用意させる。

「ねぇ、早くしてくれないかしら。私もあなたたちみたいに暇じゃないの」
「なんだそれじゃ茶菓子は要らないか」
「いらないとは言ってない」
　虎金が菓子を片付けようとすると華扇は彼女の手を止めた。
「はぁ…仕方ないわね。ちゃんと聞くから、早く話して」
　華扇は観念して腰を下ろした。
「じゃあ話すぞ。使いの者からあらましは聞いたな?」
「ええ」
「部下が犯人と接触した。その部下は私が愛顧してる奴でな。そこらの妖怪には引けを取らない奴なんだ」
「で、その子が負けたから自分が出るべきだと考えたけど結局分からなくて私に頼ったということ?」
「察しがいいな。その敵とやらが厄介でな。部下の話を聞く限り私一人じゃどうにも分が悪い」
「その敵とやらは誰なの?」
「ひとり　と　人間の男　だ」
「ひとり?それって河童のひとりかしら?」

「そうだ。ひとりは―「分かった。もういいわ」
華扇は菓子を口へ放り込み、立ち上がった。
「おい、まだ話は終わってないぞ。ここからが―「もう結構よ。その話の内容はもう知ってる」
「お、おお、知ってるのか。なら私と一緒に―「それも結構。この問題はあなた以外と対処するわ」
「あ?今なんて言った?」
「この二名に関しては知り合いにも頼まれてるの。それに、貴女と一緒にやるくらいなら私一人の方が早く終わる」
「てめぇ、私を舐めてんのか?」
「ええ、仮にも四天王と呼ばれている癖に一人で敵に向かわない腰抜けだと思ってるわ」

瞬間、空間が揺れ、壁にはひびが入る。
「一度死ぬか?」
「やれるものならやってみなさい。できないでしょうけど」
そこで虎金は完全にキレた。

互いの拳が交わされようとしたその時
「止めな!!」
何者かが間に入り、両者の拳を止めた。
「「酒呑(しゅてん)様!」」
酒呑。妖怪の山の上層部である鬼を纏める山の総大将が名乗る名。ちなみに天狗の総大将は天魔と呼ばれる。
「訳は知らんが喧嘩はよしな。四天王同士が争うなんてみっともないよ」
「しかし、酒呑様。茨木の奴が私を侮辱したのです」
「相も変わらず女々しい奴だね虎金。そんなの黙って聞き流せ。茨木も茨木だ。あまり気に障ることを言うな。ただでさえ鬼は気が短いんだ」
「善処しますよ」
「まったく、上の者がこれじゃ下の者への面目が立たないよ」
「また、面子ですか」
「世捨て鬼を目指すあんたには上に立つ者の気持ちなんて分からんだろうね」
「ええ、解りませんね。力で支配する組織の苦労なんて」
「文句があるならいつでも去りな。ま、その時はちゃんとけじめをつけてもらうけどね」
「それじゃ貴女様がいる限り、出ていけませんね」

「そういうことだ。あんた頭は良くなったけど反抗的なったね。昔はもう少し可愛げがあったのにさ」
「知と年を重ねれば、嫌でも変わりますよ」
「ふぅん。それじゃ知と老いは劇薬だね。変わらなくていいとこまで変わっちまう」
「この世に不変なものなど存在しません。たとえどんなに拒んでも、いつか必ず変化は訪れるものです」
「おや、あたしに説法かい？」
「ええ、私なりの親切ですよ」
「それならありがたく受け止めとくよ」
　この二人の会話の間、虎金は話に割り込む機会を窺っていたが結局入れなくて黙っていた。

　東の山の先に少し寂れた神社が一つ。

そこには八雲　紫の式　藍　の姿があった。
「博麗の巫女よ、聞いているのか？」
「ええ、あの馬鹿が私にまた一つ厄介事を吹っ掛けてきた　てことでしょ」
「貴様！紫様に向かって馬鹿とはなんだ！」
「だってあいつ、考えてるふりして実は何にも考えてないでしょ。面倒事はぜーんぶ他人に丸投げで自分は暖かい布団でゴロゴロしてるだけ」
「もし貴様が巫女で無ければ八つ裂きにしてるところだ」
「口だけならどうとでも言えていいわね。ま、実際に八つ裂きにされるのはあんただけど」
「ぬぅぅ」
藍は怒りのあまり唇を噛みしめすぎて口の端から血を流していた。
事実、この巫女と藍が戦えば藍が一瞬で塵となるだろう。
それくらい、この博麗の巫女の力は常軌を逸している。
「そんなに悔しがらなくていいでしょ。それにその頼みも聞かないとも言ってないし」
「む。それならいいが」
藍の表情はスッ　と戻った。
「うっ、いつ見てもそれ、気味悪いわ」

「仕方ないだろう。そういう風に組まれているのだ。もう少し最適化されればましになるはずだ」
「ならあんたの修行も早めに終わらすべきね」
「よろしく頼む」

「う、ここは」
「気がついた？私の家だよ」
「花櫚様。……すみません、私が…」
「いいのよ。もう終わったこと、責任を感じるのなら次の仕事で結果を出してね」
花櫚は楓の頭を優しく撫でた。
「花櫚様…。お慕い申しております」

「はいはい」
優しい情景の裏腹、花櫚のはらわたは煮えくり返っていた。
私の可愛い楓を傷つけ、さらに私に恥を掻かせたあの男を

必　ず　殺　す

その殺意は静かながらも鉄を溶かすほどに、沸々と沸き上がっていた。

一方、雅とひとりは新居にて睡眠を取っていた。
二人が目覚めた時には既に陽は沈みかけていた。
静かなる休息。
これはその一日が平穏であったということに他ならない。
それは二人が望む日々。

しかし、二人が眠っている間に局面は刻一刻と進んでいった。

第十話

例の騒動から十日ほど経ち、雅たちは何の襲撃も受けず、平穏な日々を過ごしていた。
「ひとり、魚取ってきたぞ」
「あぁ、そこにおいといてくれ」
住まいは変われど、生活は以前と変わらなかった。
ただひとつ変わったとすれば、食卓に筍が多くでるようになったくらいだ。
「ふぅ。　何してるんだ？」
「蚕を育ててるのさ。これから布を作るのに必要だろ？」
「そんなもんどこで取ってきたんだ」
「それは、乙女の秘密だよ」
「けちだなー。教えてくれたっていいだろ？」
「蚕なんて何処にでもいるよ。特にこの郷にはね」
「そんなもんかー」
会話を終え、雅は縁側に座り、一息吐く。
こういった日々がいつまでも続けばいいなぁ

ただただ純粋に彼はそう思った。

八雲邸にて紫はその日ようやく動きを見せた、布団の中で。
もぞもぞと蠢く布団に影がさす。
「いい加減、目を覚ましたらどうだ？」
「ぐぅーぐぅー」
「わざとらしい狸寝入りをするな！」
「もう、うるさいわね。後一週間だけ」
「どれだけ眠るつもりだ！ただでさえ、お前は眠り過ぎだというのにこの期に及んでまだ惰眠をむさぼる気か」
「惰眠とは失礼ね。今後の計画のために力を貯めてるのよ」
「とにかく！もう起きろ！」
その人物は布団をひっぺがした。
「あぁ、私の可愛い布団ちゃんが」
「何が可愛い布団だ。その愛情を少しでも式に分けてやれ」
「あら、その事に関しては貴女も人のこと言えないんじゃない？隠岐奈（おきな）？」

「ふん、それはあいつらが出来損ないだったからだ。しかし、今回手に入れたのは今までの木偶とは違うぞ。彼女らは童として非常に優れた器だ」
「あら、後戸の神様は怖いわね。人をまるで道具のように」
「戯けたことを。あのままあの子らを放っておいても、見世物になって終いだ。私が有効に活用してやったのだよ」
「そういうことにしといてあげましょうか」
「論点が逸れたな。いいから起きろ」
「何をそんなに急いでるのかしら？」
「貴様、今この局面がどれほど重要か分かっているのか？」
「あなたこそ、今は幻想郷における一つの転換点にしか過ぎないのよ」
「一つの転換点だからこそ、重要なのだろうが！」
「いいえ、これはただの転換点。これからいくつも生まれるであろう内の一つでしかない。最も重要なのはこれから行われる大結界の作成及び外界からの独立よ」
「あぁ、それが第一だろうな。だが、この幻想郷の情勢が変わる分岐点である今も重要出ない訳がないだろう！」
「落ち着いて、お茶でも飲みましょう。そんなに気を張らなくても大丈夫よ。万事、上手くいくわ」

「なぜそう言い切れる」
「だって、もう駒は揃っているもの。後は正しい手順で指すだけ。もし、どこかで不具合が生じたとしても、私たちであれば修正できる」
「大した自信だ。だが、悪くない。うん、その理論は悪くないな」
「でしょう?さ、お茶でもしましょう。悪いけど淹れてくれるかしら」
「お前の家なんだからお前がもてなせ」
「まぁ、なんて面の皮が厚いの」
「全く、お前と話してると会話してる気がせん」
「あら、誉めてもこのお菓子はあげないわよ」
「あぁもう好きにしろ」
こうして賢者の会合はお茶会へと移行した。

今日も今日とて日が暮れる。
妖怪の山の捜索班は郷全土をくまなく、休みなく捜索するが、目的を見つけることが

出来なかった。
「今日も成果は無し、か」
「既に奴の能力下にいるのかもしれませんね」
「それは厄介だな」
　指揮を担当する虎金とその補佐である花櫚は今日の報告の整理をしていた。
「鼻も効かぬか？」
「ええ、匂いでの追跡も不可だと聞いてます」
「奴の能力で器官に異常を来したか」
「器官には異常は見られませんでしたが、おそらく奴らのものだけを無意識下で認識していないのかと思いますよ」
「ふむぅ。打つ手なしか？」
「数秒、いえ数瞬さえ奴らを捉えることすらできれば私が追えるんですけどねぇ」
「まぁ、そう焦るな。いずれ気を抜いて尻尾を出すはずだ。奴の目的がこの山ならばな」
「そうだといいんですがね」

夜も更け、絶好の肝試し日和なこの頃。
時代錯誤な着物を纏い、竹林を闊歩する娘が一人。
その黒髪は月明かりに煌めき、その面はまさに美麗極まるものであった。
その娘はやがて池にとどまり、水面へと屈み、水を弄ぶ。
そのうち、もう一人、そこへやって来た。
「おい」
声をかけられたので、黒髪の少女は顔を上げる。
赤い瞳の少女と目があった。
燃え上がるような真っ赤な瞳だった。
「どちら様?」
そう尋ねるとその少女は鼻で笑い
「藤原、と言ったら分かるか?」
と答える。
「藤原、その名前の人間は多すぎて覚えてないわ」
「そうか覚えてなくても別に構わない。お前が輝夜であるならそんな些細なこと、どう

でもいい」
「あら、私のことを知っているなんてとんだ長生きな生き物もいたものね」
「ああ、おかげさまでな。死ねなくなったよ」
「へぇ、もしかしてお仲間なのかしら？」
「仲間？　はははは！私とお前が!?天地がひっくり返ってもそんなことなりはしないなぁ！」
「お盛んね。もう真夜中よ、少しは静かにできないの？」
「あぁ、お前をぶっ殺して静かにさせてやるよ！」
妹紅は辺り一面を業火で吹き飛ばした。
それと同時に妹紅の体も爆散する。
たちまち、辺りは無人になった。
かのように思えたが
「誰かは知らないけど、売られた喧嘩は買うわよ？」
跡形もなく焼き消えた輝夜という少女の肉体がそこにはあった。
そして、妹紅もまた大きな炎を上げ、肉体を構築させる。
「私の父はお前によって汚名を被せられた。だが、そんなこと、この藤原妹紅にとってもはやどうでもいい！」

妹紅はさらに炎を巻き上げる。
「なら、なぜこんなことをするの？」
「それは、これが私だけによる私のためだけの復讐だからだ！」
炎の噴出の勢いを利用して輝夜に思い切り殴りかかる。
輝夜はそれを避けきれず、頭は捻じ飛ばされた。
だが、頭部を失ったのにも関わらず、今度は輝夜が妹紅の頭を掴み、捻じ切る。
共に死屍累々の戦闘スタイルであった。
死にながらも殺し、また死ぬ。
「良い。良いわ。理由はどうでもいいけど私も屋敷に押し込められて退屈だったの！ちょうど貴女みたいな遊び相手をずっと求めてたのよ！」
「相思相愛ってかぁ？いいねぇ！なら、望み通り嫌になるほど殺してやらぁ！」
先ほどの静けさが嘘のように竹林には爆音と閃光が交差していた。
二人の喧騒の近くに一つ人影。
「まさか、ここに私たち以外の蓬莱人がいるなんてね」
その人物は月の賢者であった八意　永琳である。

「あの娘が摂取したのは帝に送ったものに間違いないわね。それ以外あり得ない。この地上にあの薬を作る技術があるとは思えないし」

永琳は何かと思案を巡らす。

とにかく、ここの住人らに存在がバレることに問題はない。いざとなれば皆殺しにすれば良いだけ。

だけど、万が一にも月の連中に捕捉されるのだけは避けたい。簡易ではあるけど結界を張っておきましょうか。

永琳は竹林の大部分に結界を展開する。

「これだけ広く取って入れば、どれだけ暴れたとしても大丈夫そうね」

それにしても、あんな輝夜の顔、久しぶりに見たわ。

楽しそうで嬉しそうな顔。

やはり、遊び相手用の薬を地上に持ってきておいて正解だった。

永琳は思わず笑みをこぼす。

宿命の二人の喧騒は簡単には終わる気配を見せなかった。

いきなり、爆音が鳴り響き、雅は飛び起きる。
「な、なんだ！」
「あたしが様子を見てくる！雅はここで待ってな！」
「いや、俺も―「だめだ！危険過ぎる！」
「…俺の能力があれば敵だとしてもバレない」
「だとしてもだ！あたしはあんたに傷ついて欲しくない！」
「それは俺も同じだ。ひとりに、傷を負わせたくない」
「…あぁ、もう分かったよ。決してあたしから離れるんじゃないよ」
「それはこっちの台詞だ」

そして二人揃って真夜中の竹林の散策を開始した。

それが彼らの命運を分けるとも知らずに……

閑話　ある河童の日記

某月　某日

どこからかは知らないがその妖怪はやってきた。

その姿は美しく、髪も瞳もまるで世界が讃えているかのような妖艶さを含んでいた。

新たな仲間が増えたので、宴会でも開こうという話になった。

たちまち、用意を済ませ、山を挙げての大きな宴会を始めた。

主役である彼女の周りにはたちまち、妖怪だかりができていた。

皆、彼女に興味津々なようで、彼女は質問攻めにあい、それに困惑しながらも少しだけ微笑みながら答えていた。

宴会も佳境となり、お開きになろうとしたとき少し問題が起きた。

酒癖の悪い鬼が河童に絡んでいたのだ。

会話を断片的に聞いていたので記す。

「おい！なんでおめぇなんかがあの女に手ぇ出してんだ！」

「ひっ！べ、別にそんな気は…」

「俺に口答えすんのか！」

「ぐぇっ、やめっ…」
どうやら、何か女性のことで揉めてたらしく、河童の方は逆らえないので抵抗らしい抵抗もできず、首を絞められていた。
それを、皆、遠巻きにして見ていた。
ある者は気の毒そうに、ある者は酒の肴に、ある者は無関心に。
そこにたった一人、近づく者がいた。
例の新入り、今日の主役の妖怪だった。
「おい、その辺で止めときなよ」
「なんだぁ?おめぇも俺にケチつけようってかぁ?黙ってみてろぉ!」
鬼がその妖怪を振り払おうと腕を振るった。
が、その妖怪はいつの間にか、河童を絞めている手の指を一つ一つほどいていた。
そして、数を数える間も無く、それは解かれた。
「大丈夫かい?」
「ゲホッ、ゲホッ。有り難うございます」
「なに、せっかくの宴会で死人が出たら目覚めが悪いからね」
それを見たとき、私は自身の不甲斐なさを恥じた。
彼女より付き合いの長い我々が仲間を助けず、今日の初めて会ったばかりの彼女が彼

を救った。
私は彼女に対し、畏敬の念をはらわずにはいられなかった。
だが、鬼の方は違ったようだ。
「舐めおってぇぇ！このくそアマがぁぁ！」
激昂しながら突進し、今度は彼女の首を掴んだ。
私は思わず
「あっ！」
と声を挙げてしまった。
どうやらそれは私だけではないようで何人かの同僚も似たような声を出していた。
とにかく、その時はどうにかして彼女を救わないといけないと思い、刹那に考えに考えを重ねた。
しかし、どうしても我々が鬼に太刀打ちできる像が浮かばず、ただ呆然と立ち尽くすことしか出来なかった。
すまない
そう彼女に謝りながらこれから起こるであろう惨状から目を背けた。
次の瞬間、肉の潰れる音と共に辺りに血飛沫が撒き散らされた。
あぁ　と思い目を開けるとそこには頭が転がっていた。

鬼の頭が

その時、その場にいる全ての妖怪の時間が止まっていたに違いない。

彼女は自らを河童だと称した。

頭の皿を見て、我々もそれを確信した。

いくら、あの鬼が下っ端の鬼だとしても、河童が勝てる道理はない。

彼女は嘘を言ったのかというとそうでもない。

確かにあの皿は同族でしかあり得ない。

では、この状況はなんなのだ！

思考が混乱している内に彼女は口を開いた。

誰にも聞こえないような小さな声で

「やってしまった」

と呟いていた。

火に照らされた顔を見ると雪のような肌がすこし青黒くなっていた。

明らかに彼女自身も動揺していた。

彼女に殺意がなかったことは明らかであった。

しかし、ここは妖怪の山。

理由はどうあれ、同志を殺めたのだ。
彼女は即刻捕らえられ、裁判にかけられた。

某月　某日

先日捕らえられた彼女の裁量が下された。
どうやら情状酌量の余地もあり、数十年の過重労役で済んだようだ。
このことを聞き、河童一同は胸を撫で下ろした。
ただ、一部の者は彼女の異様さを気味悪がっていたが、大半の者は彼女に対して嫌悪を持たなかった。
しかし、同族と言えど一枚岩では無いので彼女の力を利用して悪どいことを考える輩も現れた。
いわゆる下克上を目論む愚者がいたが、密告され、捕らえられていた。

馬鹿なやつらだ。
そんなことよりも私は彼女の身のことを案じて、普段の仕事もままならない。
次、彼女と話す機会が有るならば、美味しい胡瓜のなる場所でそれを摘まみながら彼女への愛を囁きたいものだ。
ただ、同じような考えをどうやら何人か持っているらしい。
好きにすればいいさ。ただ、負ける気もないが。

某月　某日
本日は待ちに待った彼女の保釈日だ。

片時も彼女のことを忘れたことはなかった。
逆に彼女への想いは募るばかりであった。
あぁ、楽しみだ。誰よりも早く、彼女に激励をして、そして親密なろう。

日が暮れる。
里の入り口で待っていても彼女はやって来る気配がない
どうしたのだろうか、何か不都合でもあったのだろうか。
翌日の朝まで待ったが結局、彼女が来ることはなかった。

某月　某日
今朝、同僚に叩き起こされた。
どうやら、彼女を見た者がいるらしい。
話を聞く限り、どうやら彼女は我々と接したくないようだ。

なんと、労役所で壮絶ないじめを受けて他人不信になったらしい。
残念だが、だからといって無理強いはしたくない。
少しずつでもいいから、彼女との関係を築いていけたらいいと思う。
我々がすべきことは彼女を迫害するのではなく、彼女の傷を癒すことなのだ。
彼女と再び出会えることを切に願う。

某月　某日
本日、彼女との接触に成功した。
彼女と出会うまでにかなりの年月を要したがようやく実を結んだ。
久々にあった彼女の姿は以前と変わらなかった。
ただ、その目にあの日のような煌めきはなかった。
彼女との会話はまるで成り立たなかった。
各々がすれ違い、意思疎通とは程遠いものであった。
しかし、彼女と接触できたというだけでも儲けだ。
少しずつ少しずつ信頼を得て、彼女がまた笑顔で笑える日を我々がもたらすのだ。
我々は彼女を『ひとり』と呼ぶことにした。

名の意味は決して一人ぼっちではなく
我々にとってかけがえのない一人である
というものだ。
彼女自身にもそう伝えているが、まだ信用されていない。
だが、我々は諦めない。
仲間を救ってくれた英雄を我々は見捨てない！
彼女の傷が癒えきるまで、たとえ、この活動をするのが私一人になったとしても私は
彼女のことを追い続けるであろう！
そして、いつか傷が癒え、生活を共にするようになったら
あの胡瓜畑で語り合いたいものだ。

第十一話

竹林には熱風が吹き荒れる。
蓬莱人たちの戦いは未だ衰えを知らない。
もはや、そこには言葉という知的概念はなかった。
在るのは獣のようなお叫びと、とめどのない死の連鎖。
お互いが完全に死ぬることがないと分かった上での全力の殺意の応酬。
魂のぶつかりあいであった。
不幸にも、その付近に居を構える者たちがいた。
一人の人間と河童だ。
彼らはこの騒ぎを何事かと、様子を見に行ってしまった。
そこにある種の油断が生じていたのには違いない。
男は自分の能力を過信していた。
それが……。

「これ以上近づくのは危険だよ」
「まだ敵の姿すら確認していないんだ。せめて、それくらいはしないと」
「雅、いいかい。他の者に姿が認識されないってのは利点こそ大きいがそれ相応の欠点もあるんだ」
「だからといってこのまま、引き下がるのも危険だ。状況は把握しておかないとまずい」
「あんたの能力は実体が消えるものじゃないんだろ?さっきから行われてるのは広範囲に渡る爆撃のようなものだよ。それを避けれるのかい?」
「大丈夫だ。俺に攻撃は当たらない」
「確証はあるのかい?」
「・・あぁ」
「それでも―「行ってくる」
　ひとりがまだ何かを言おうとしていたが、雅は無視して現場へ向かった。

「ヴォ”オ”オ”オ”!」
「アハハハハハハハ!」
　踊り狂うかのように二人は肉体を跳ねさせる。

ノーガードの戦いに竹林は悲鳴を上げていた。
地は裂け、竹は塵一つ残らない。
永琳が展開した結界内の三分の二が荒地と化していた。
「なんだ、あれ…」
雅は遠目ながら、その狂気を目の当たりした。
姿こそはっきり見えないが、それらが常軌を逸した化物だということは分かった。
その時、雅の頬に痛みが走る。
「えっ…」
手を当てると血が手についた。いつの間にか頬が切れていた。流れ弾が雅の頬をかすったのだ。
まずっ！
雅は真っ先に退避を考え、行動を取ろうとした。
が、その前に虹色の弾幕が雅に向かって飛んでくる。
あっ、死―
次の瞬間、雅は空を見上げていた。
「えっ、生きて―「この馬鹿っ！何が大丈夫だ！危うく死ぬ所だったじゃないか！」
「あっ、ひとりすまな―「あんたが死んだらあたしは…」

ひとりは涙を流す。嗚咽混じりに何かを言っているが聞き取れない。
「ごめん。ごめんよひとり。もう二度と、危険な真似はしない」
雅はひとりを抱きしめ、背中を撫でながら諭した。

「検知！目標の匂いを検知しました！」
「方角は!?」
「南！竹林方面です！」
「ほんと、貴女って娘(こ)は優秀！」
楓の報告を聞き、花櫚は楓を抱え、全速力で竹林へと向かった。

「なに、これ？」
竹林に近づき、その地の状況が異常だということに気づく。
「もしかして、罠だった？」
花櫚はこの場は撤退すべきかどうか考えた。

不確定要素の多い中であるので、ここは一旦上に指示を仰ぐのが正解だ。
だが、一瞬、たった一瞬、彼女の心の中になにかが沸き上がった。
それは彼女の妖怪としてのプライド。今まで味わされた屈辱。人間ごときに翻弄され続けたこの幾日の鬱憤が彼女の闘争心に火をつけた。
「どうしますか?」
「このまま目標を追うわ」
「…了解しました」

羽根を広げ、再び加速しようとした時、楓は声を上げた。
「目標を視認!こちらへ向かってきています!」
「わざわざお出迎えってわけね」

数秒後、竹林の影から2つの人影が出てくる。
今宵は満月。その姿はよく見えた。
一人の男と河童。
間違いなく、山側が追っていた目標であった。
だが、まだあちらはこちらに気づいていないようだった。

「まだこちらに気づいていないようですが、先に仕掛けますか？」
「ええ、先手必勝よ」
花櫚は楓を下ろして、団扇を取り出し、思い切り振るった。
扇いだ先から真空刃が彼らに襲い掛かる。
かのように思えた。
着弾する瞬間、ひとりは顔をこちらへ向け、腕を払い、真空刃を打ち消した。
「なっ!?」
「…化物ね…」
天狗二名は彼女その剛力に改めて驚いた。
そして来るであろう追撃に備え、構えたが
「逃亡!?」
彼らがとった行動は逃亡であった。
「なぜ逃げるの?!奴らは私たちを誘き寄せたんじゃないの!?」
花櫚は理解できなかった。
この状況も、奴らの考えも。
この時、彼女は思考を放棄し、自らの感情に流されてしまった。
憤怒。

何も理解できないが故の怒り。蓄積されてきたその感情はついに爆発した。
「舐めやがってぇぇぇぇぇ！」
その羽根は反り返り天を指し、体のありとあらゆる血管は筋を張る。
「死ねぇぇぇぇぇぇ！」
体を震わせ、全身全霊の力を彼らに向かって解き放つ。
それはまさに嵐と形容すべき暴力。
その凄まじさに空間は歪み、近くにいた獣たちは一瞬で細切れとなった。
それでも
「喝ッッッッッ！」
この規格外の化物には到底通じるものではなかった。
花櫚の全力の一撃を咆哮だけでかき消した。
「は、はは、こりゃ想定外。……楓、山に戻りなさい」
その事実に怒りは吹き飛び、自身の敗北を悟った。
「花櫚様！私は！」
「いいから！私が時間を稼ぐから早く虎金様を呼んできて！」
「…死なないで、下さい」
楓は自身が出せる最高速度で山へと戻っていった。

「…どうか、彼らがここにいる内に帰ってきてちょうだいね」
花櫚は手汗にまみれた団扇を握り直し、再び戦闘態勢へと入った。

「厄介な奴らに見つかったねぇ」
「どうする？戻るか？」
「いや、竹林に戻る方が危険だ。あれらは私でも手にあまるよ」
「なら、応戦か」
「相も変わらず好戦的だね」
「仕方ないだろ。それしか思いつかない」
「そうだね。ここまできたらもう話し合いを、とも言ってられない。これが終わったら次は地の底か、天の上かにでも逃げようか？」
「俺はひとりと一緒なら何処だっていいさ」
二人が話していると次々に風の刃が降り注いでくる。
ひとりはそれらを全て弾き、或いは打ち消していた。
「こんななまくらじゃ傷一つつかないよ」

ひとりは石ころを拾い、花櫚に向かって投擲する。
花櫚はそれをまるで地上から降ってくる小さな隕石かのように思えた。

打ち払おうとするが、完全には払えず、石は彼女の肩を貫いた。
「ぐぁっ！」
「ほれ、まだまだ行くよ」
ひとりは次々と石ころを拾い、投擲した。
地上から降り注ぐ流星群。
いくら団扇を扇ごうとも、いくら暴風を吹かせようとも、それらは確実に花櫚の肉を削った。
「はぁ、はぁ、はぁ」
「どれだけ離れてても目視できる範囲にいるなら簡単に打ち落とせるよ」
「糞っ…」
もはや力の差は歴然。
たとえ、花櫚がこの場から逃走しようとも誰も彼女を非難したりはしないだろう。
それでも、なお彼女は戦い続けた。
「うおおおっ！」

花櫚は空を蹴り、また蹴り、蹴り、蹴り、加速を始めた。
その速度はもはや同期の天狗でさえも目視できないであろうものだった。
せめて、一撃！この化物に！
速度が最高到達点に達した瞬間、ひとりに特攻を仕掛ける。
鬼ですらも捉えることが難しいこの攻撃を！奴のどてっ腹にぶちこんでやる！
もちろん、その攻撃による体の負担は凄まじい。骨は軋み、肉は骨から剥がれようとする。目は乾き、四肢が千切れるかもしれぬほどだ。まさに捨て身の一撃。
この技を見て虎金は思わずこう声を漏らした。
『まさに神風である』と

「くらぇっっっっ！」
花櫚が着弾した先は

硬い土の上だった。
「がぁっ…」
同時に頭に強い衝撃が襲う。
「速い。確かに凄まじい速さだったよ。でも、最初から、来る位置がわかってるからどう

とでも対処できるんだよ」
ぁぁ、悔しいなぁ。一撃も当たらなかった。一矢報いることもできなかった。
――ザシュッ――
地面に倒れる花櫚の胸に刃が突き立てられる。
「用心深いというか、念入りというか。もう戦闘不能だってのに、丁寧だねぇあんたは」
「そりゃ確実にトドメを刺しとかないとだめだろ。実はまだ力が残ってて反撃くらって死にましたなんか洒落にならないぞ」
「確かにそうだ。それに関してはあんたが正しいね」
他愛のない会話を薄れ行く意識の中で、花櫚は耳にいれていた。
だが、その思考は、思いは
虎金さま、ごめんなさい。楓、強く生きてね
愛する者たちへの想いであった。

「悔しかったろうなぁ、花櫚」
空気が一気に重みを増す。
「力が及ばず、それでも立ち向かい、志半ばで絶えた。その悔しさ、我が身のように感じ

られるよ」

現れるは鬼の四天王　大熊　虎金。

その浮かべる表情はまさに鬼であった。

第十二話

「四天王のおでましか…」
「久しいな河童のひとりよ。どうやらうちの部下が大層世話になったみたいだな」
「あぁ！花櫚様！」
　虎金に次いで楓も到着した。
「あぁ…花櫚様。すみません、私がもっと早く…」
　涙を流しながら花櫚に駆け寄ろうとするが
「待て、白狼の娘。無闇に敵陣へ向かうな」
「あぁぁぁ」
　虎金が首根っこを掴み、止めた。
「どうやらそっちの天狗は心神喪失みたいだが？」
「黙れ人間。貴様さえいなければあの娘は死ななかった」
「こいつをここまで痛めつけたのはあたしだよ」
　ひとりは花櫚の亡骸に指を差す。
「痛めつけたのはお前だが、殺したのはその人間だ！」

虎金は拳を雅の方へ向け、そして輪ゴムを弾くように人差し指と中指を弾いた。
その一連の動作が終わる前に雅は本能的に体を横へ飛ばした。
――ピシッ――
「ぐぇっ？」
気がついたら右頬が横に真っ二つに裂けていた。
「ちっ、頭を割るつもりだったがギリギリで躱されたか」
「う、ぐあああああ！」
徐々にその痛みを雅の脳は認識した。
ひとりは雅が傷ついたことに怒り、今日初めて明確な殺意を虎金に向けたが
「退くよ！掴まりな！」
雅の身を案じ、撤退という選択をした。
「逃がすか！白狼、追うぞ！」
「…必ず仇は打ちます。だから今一度、ここで待っていて下さいね」
楓は花櫚へ寄り添い、頬を撫でた。
「白狼！」
「解ってます。逃がしませんよ。いえ、逃げられません。だって、あの妖気がしますから」

「何？」
「賢者が動き出したようです。もはや彼らに逃げ場などありません」

雅たちは音速以上の速さで移動している。
しているのにも関わらず、一向に鬼たちの姿が遠ざからない。
「どういうことなんだ!?」
「あぁ、ちくしょう。あいつらまで来るのかい…」

八雲邸にて、紫は縁側で酒を嗜んでいた。
月見酒をしているのか、それとも…
「遅かれ早かれ、よ。もう夢の時間は終わり。そろそろ起きないと健康に悪いわ」

それはスキマの先の光景が全てを物語っているだろう。

「どうやら、逃げ場はないようだが？」
　虎金は再び拳を構える。
「やるしか、ないようだね…」
　ひとりも雅を庇うように態勢を整えた。
「目を覚ませ、ひとりよ」
　ひとりの様子を見て、虎金はそう呼び掛けた。
「は？何を言ってんだ？」
「その人間の能力、〝洗脳〟とやらでお前は操られているのだ。洗脳されているお前に言っても無駄だと思うがお前はその人間に―」
　その言葉を言い切る前にひとりの弾幕が虎金を襲った。
「ふざけんじゃない！貴様らが！あたしたちを！否定するな！今まで！散々！あたしを―！」
　弾幕の爆発と共に感情が爆発する。
「そう狭い視界で世界を決めつけるな…」

虎金は弾幕から脱出し、ひとりの横へ回り、蹴りを放つ。
「ぐっ！」
雅が近くにいるため、受け流すことは出来ず、正面からそれを受け止めるしかなかった。
「げはぁっ！」
「ほう、これをくらって割れてないなんて大したもんだ」
その蹴りの余波でひとりの後ろの地面は地平線の彼方まで割れていた。ひとり自身にもかなりのダメージが入った。
「雅…離れてろ…」
ひとりは膝を着きつつ、雅の方へ気にかけるがその姿はない。
「む！奴め！どこへ消えた！」
そのことに虎金も気づき、辺りを見渡すが姿を確認できない。
「しまった！もう奴の能力が及び始めたか！」
虎金は集中するが、やはり気配は感じられない。
「糞、せめてひとりだけでも回収して退くか」
その雅はというとひとりの横から虎金の脇へ回り、刃をその胸に振るっていた。
そしてひとりもまた、その虎金が狼狽えている隙を突いて一撃、鳩尾にぶちこんだ。

「ぐぉっ！」
初撃はひとりの一撃。雅のことに気をとられた虎金はその一撃をモロに食らった。
そして態勢が崩れたところに雅が刀を振るう。
二人は連携攻撃を仕掛けていた。

その攻撃は確かに決まっていたであろう。虎金が一人だけで戦っていたのであれば
の話だが。
雅の振るった刀は割り込んできた刀によって弾かれた。
「なっ！」
「死ね。花櫚様の仇だ」
楓はまるでそこに雅がいるかのように刀を振り下ろす。
「うっ…」
雅は避けようと思ったが、体がついてこない。
「ちっ、まさか視えてんのかい？」
間一髪、ひとりがそこへ割り込み、刃を受け止める。
「あぁ、そうだ。この下郎は花櫚様を殺したのだ。だから、必ず私が殺す」

怒り、殺意、恨み、怨み。　それらの情念を抱きながら楓はずっと雅を殺す隙を窺っていた。ずっと雅の存在を意識していたのだ。

まずい。どうする。逃げる→無理。戦う→勝てない。どうしよう。

雅は混乱していた。まさか自身の能力を破られるとは思っていなかった。

「ふんっ！」

虎金がひとりを殴り飛ばす。

ひとりは防御するが、随分と遠くへ吹き飛ばされた。

「白狼、奴が視えるのならそちらは任せたぞ」

「御意」

「糞っ！雅、なんとか持ちこたえてくれ！すぐ向かう！」

「ほぉ、この私に勝つ気でいるのか。それも簡単に…舐められたものだ！」

少し離れた場所で、二人の闘いは始まった。

「さて、人間よ。何か言い残すことはあるか？あっても言わせないがな」

楓は躊躇いなく、雅へ斬りかかった。

その時、雅は走馬灯を観た。
今までの人生。外での空っぽな日々。空虚であった自分。意味を求め、意味もなく死を選んだ憐れな人間。
そうか、俺は死んだんだ。自分から死を―
そして、そこから始まる幻想郷での日々。そこは前の世界と何一つ変わらなかった。
残酷で、無慈悲で、生きる意味など考える暇などなかった。
ただただ
生きたい
それだけを考えていた。

そして、ひとりと出会った。
彼女との出会いは俺に意味を与えてくれた。
俺が生きる意味を。
彼女の存在が俺が俺たらしめる。
俺は
彼女と生きたい

その意志故か、それともただの生存本能故か
雅は無意識に結界を展開した。
「なっ！」
振り下ろされた刃はその障壁を破ることなく、塞き止められた。
「これは…」
雅に霊力的な才能はない。勿論、それは今も変わらない。
だが、雅は図らずとも外部からその力を取り込んでいた。
迷いの竹林の土は魔力を含む。
夜を照らす月の光によってそれは取り込まれる。
そして、そこから生える筍には―
その魔力は生物濃縮的に雅の体にも取り込まれている。
それだけではない。
妖怪の敷地と知らず、そこから取っていた食物たちにも微力ながら妖力やら魔力やらが含まれていた。
雅は知らず知らずの内に力を蓄えていたのだ。

ただそれを本人は理解していなかった。自身は非力な人間だという固定観念に囚われていたからだ。

だが、この瞬間、彼は理解した。

「俺も、戦える！」

第十三話

「うおおおおっ！」
雅は雄叫びをあげた。それは力があることの歓喜ゆえかそれとも己を奮い立たせるためか。
「ちっ、まさか、結界を張れるとは。だが、殺りようはいくらでもある！」
楓は後ろへ飛び退き、弾幕を展開させる。
「私の妖力が尽きるか、貴様の霊力が尽きるか。根比べと行くぞ」
その無数の弾幕を一気に雅の方へと発射した。

一方、ひとりと虎金は共に一進一退の攻防を続けていた。
「やるじゃないか、河童！」
「鬱陶しい！さっさとくたばりな！」
あちらの二人とは対称的にこちらは肉体のぶつかりあいだった。

もし、弾を撃ったとしても小細工だと言わんばかりに共に弾き返してしまうに違いない。

ほぼ互角の戦い。気を抜けばたちまちどちらかが挽き肉となってしまうだろう。

「山を割り、地を割り、海を割り、空を割るこの力をここまで耐えた奴は酒呑様を除いて貴様だけだ。尊敬に値するぞ！ひとり！」

「なら見逃してもらえればこっちも助かるんだけどね」

「それはならん。貴様らは花欄を殺した。柿祢の方はまだ容疑の域を出ないがあやつの方は事実だ。それ相応の報いを受けてもらう」

虎金は一旦構えを解き、再び構え直す。

「ガァっ！」

「なっ―」

―迅（はや）っ

―ドガァッッッッッ！―

虎金が放った突きがひとりの顔面にモロに入る。

「ブッ」

ひとりの意識は完全に飛んだ。

「貴様の強さは河童ながらにしては異常だ。もはやそれは天狗さえ、鬼さえ超えた力だろうな。だが、舐めるな。私は四天王　大熊　虎金だ」

虎金は拳を納める。

「さて、意外にも白狼が苦戦しているようだな。少し手を加えてやるか」

虎金が雅たちの方へ向いた瞬間

―ドゴォッッッ！―

ひとりの蹴りが彼女の横腹に刺さる。

「ゲェ！」

あまりの激痛に腹を抱えて膝を着いた。

「あんたこそ、あたしを舐めるなよ。あんたが鬼だろうが、四天王だろうが、あたしはあんたをぶちのめしてあいつと生きるんだ！」

「なるほど…。一筋縄では行かんか！」

再び猛攻の応酬が始まった。

この嵐が止んだ時にはどちらかが地面に伏していることだろう。原型が残っていればの話だが…

「はぁっ、はぁっ、はぁっ」
楓は自身に残っている全ての力を弾幕に使いきった。
「どうだ人間。さすがにこれは防ぎきれまい」
煙が晴れ、そこには何かが横たわっているのが見えた。

―殺った！
能力で雅の様子を確認し、その勝利を確信した。
歓喜に身を震わせながらも確実なるとどめを刺すために雅へと近づく。
「花櫚様、今その無念を晴らします！」
自身の直の眼でも雅の身体を確認する。
全身に酷い裂傷、頭部からの出血、右腕の一部欠損。万が一、生きていたとしてももはや抵抗すらできまい。
「死ねっ！そして地獄でその罪を償いながら花櫚様に侘び続けろ！」
――ドスッッッッッッ！―
その音は

楓の胸から響いた。

「えっ？」

次の瞬間、楓は浮いていた。

霊気の大刃に胸を貫かれ、持ち上げられていたのだ。

「そ、ん、な」

「死ぬのはお前だよ。犬コロ」

「貴様、わざとぉ」

「あぁ、死んだふりでもすればお前は喜んで近づいてくるだろうと思ったよ。油断してな」

「ぐぅ、む、無念…」

あぁ花櫚様、今そちらへ―

虚空へと手を伸ばし、そして楓の体は完全に脱力した。

「勝った、か。はぁ、楽じゃないな勝利ってのも。おかげで体はボロボロだ」
傷は確かに酷いが見た目ほど重傷ではなく、致命傷もなかった。
「あっちに加勢してやりたいが、ちょっと無理そうかな。いや、弾の一発でも撃って奴の気を逸らせれば…」
「それは贅沢ってものじゃないかしら？」
突然、雅の後ろから声が聞こえた。
「なっ、誰だ！」
「あら、ひどいわ。自分の殺した女の声も忘れたの？」
その声の主は八雲　紫であった。
「そんな、お前は――！」
「おかげさまで苦労したわ。まさかあなたがあんな力を持ってたなんて」
「糞っ！」
雅がなけなしの力を振り絞って立ち上がり、構える。
「そんな身体で私に挑むの？勇ましいわね。それも愛故かしら？」
雅は弾を三発ほど、時間差で紫へ向けて放った。
紫はそれを避けず、わざわざ当たった。
「弾で気を逸らして、能力発動　ね。頑張ってるようだけれどもう対策済み。種さえ分

かればどうとでも防ぎようはあるのよ?」
紫は服に付いた埃を払い、大きな欠伸をした。
その姿を見て少し憤りを覚えつつも雅は冷静に状況を判断する。
こいつ今対策済みと言ったな。なら迂闊に攻撃するのはまずい。どうする?
雅が思考巡らすこと数分、ついに紫は動きを見せた。
「もしかして逃げたのかしら?思ったより臆病なのね」

こいつもしかして視えてないのか!?なら―
雅は手頃な石を拾う。
「逃げたとしても、まだここにいたとしても無駄よ。認識できないと言っても存在が無くなるわけではない。範囲攻撃で対処可能よ」
紫はスキマに腰かけ、弾幕を展開する。
その弾幕が展開しきる前に、雅は紫と自分との距離を底辺とした二等辺三角形の頂点となる部分の茂みへと石を投げた。
―ガサッ―
「あら、そんなところに隠れてたの?」
間髪入れずに今度は短刀を投擲する。

「頑張ってるわねぇ」
紫はスキマを開き、短刀を防ぐ。
そのスキマが閉じた瞬間、雅が目の前に現れた。
「うおおおおおおお！」
霊力で作った刀を目一杯振り下ろす。
「上出来よ。素人にしてはね」
振り切る前に雅の動きが　ピタリ　と止まった。
「なっ、体がっ」
「極限の状態で限りなく勝ち目の薄い相手に対して一筋の勝算を追った。敵ながら勝算を贈るわ」
パチパチパチ　と紫は拍手をする。
「なら、離せ！もう俺たちを放っておいてくれ！」
「それは出来ない相談ね。あなたの命だけは見逃してあげる　なら叶えてあげるけど？」
「それなら死んだ方がましだ！」
「そう。なら、死ぬ？」
紫は扇子で口元を隠し、眼を曲げた。

「―ッ！」

その笑みに雅は背筋を凍らせた。

「冗談よ。今あなたに死んでもらったらこちらとしても困るのよ。あなたが死んで、彼女が死んだら、こちらとしてもかなり痛手なのよね」

「どういうことだよ…」

「仕方ないわねぇ。機密事項だけど、特別に教えてあげる。他言しちゃだめよ？」

「だからなんだよ！」

「近々、私たち地上の妖怪は月の民との戦争を始めるの。能力、基礎力、共に大妖怪である彼女はこちらの戦力の要になる存在よ」

「は？」

「彼女の”道を示す”能力はあなたが思ってるよりかなり貴重なのよ？それに別に月の民との戦のためだけに彼女を貴方から離したいわけじゃないわ」

「待てよ。話の整理が…」

「彼女にはもっと広い世界を知って欲しいの。ただでさえ狭いこの幻想郷の中でもっと狭い世界で生きてる。世界は開かれているというのに、それってとても可哀想じゃない？」

「それはひとりが決めることだ！お前の価値観で勝手に決めつけるな！」

「ならどちらの世界が良いか、彼女に決めてもらいましょうか」

第十四話

雅が紫に捕らえられた頃、ひとりたちの戦場にも変化が訪れた。
「私は助太刀しろとは言ってないはずだが」
「別に助けに来たわけではないわ。こっちの仕事よ」
虎金の横に一人の女性が立つ。その姿を見て、ひとりは冷や汗を垂らした。
「茨木…華仙か…」
鬼の四天王が二人。いかにひとりが強者といえど、その二人を相手にするのはほぼ不可能に等しい。
「万事休すか…」
「否、詰みよ」
紫は捕らえた雅をひとり見せつけ、王手をかけた。
「雅!」
「まだ殺しはしないわ」
「なぜ放っておいてくれない!あたしたちはただ、普通に、暮らしたいだけなんだ!それ以外なにも求めていないじゃないか!」

「それがいけない　と言っているのよ。さて、貴女には選択権があるわ」
「なんだって…？」
「もし貴女がこの男を諦めてくれるなら、私はこの男を殺さず、逃がしてあげる」
「それは―「貴女はこの男と生きることが全てだと思い込んでいる。」
「もう一度言ってみろ…！二度とそんな口叩けないように地獄の底へ沈めてやるぞ！」
「そう。ならこの殿方も一緒に連れて行こうかしら」
　紫は右手を雅の首へかけ、握る。
「がっぁぁぁ！」
「雅！」
「動いたらこの男の首を刎ねるわよ」
「くっ！」
「待て！八雲　紫！」
　虎金が二人の間に割って入る。
「何かしら？できるだけ簡潔に話してちょうだい」
「その二名は我々、山の妖怪が追っていた者だ。助太刀はありがたいが引き渡し願いたい」
「そうね、嫌よ。先に私たちが追っていたもの。横取りしにきたあなたたちはすっこん

でいなさい」
「貴様、下手にでれば調子に乗りおってっ……」
　虎金の鳩尾に華仙の一撃が入る。ひとりとの戦いで消耗していた彼女を沈めるには十分な威力であった。
「邪魔者いなくなったことだし、話を続けましょうか」
「……本当に雅を見逃してくれるのかい？」
「えぇ、約束は守るわ」
「ひとり！…がっ！」
　雅が叫ぼうとすると紫の手？が口を塞いだ。
「決めるのは彼女　でしょう？」

「そうか。雅、あんたは生きたいか？」
「モガモガ…　ひとりと生きられないなら死んだ方がいい！」
「そうか…。それを聞いて安心したよ」
　ひとりは帽子を脱ぐと、拳を振り上げ、自らの皿に向けて思い切り振り下ろした。
「あの世でまた会おう、雅」

「止めろぉぉぉぉ！」
ひとりが拳を振り下ろす直前、怒号と共にひとりの体になにかがぶつかった。
ひとりはバランスを崩し、ぶつかってきたそれと一緒に倒れた。
「ちっ、一体なんだって―「駄目だ！ひとり殿！そんなことをしては駄目だ！」
ぶつかってきたのはいつかの河童であった。ひとりの胸倉を掴み、先程の行動を咎める。
「邪魔するんじゃないよ。あんたから頭を飛ばされたいか？」
「それでひとり殿が死なぬと言うのなら、どうぞ飛ばしてください！」
「彼を殺すのならばまず私から！」「いえ、私が！」「俺が！」
「「「「ですから、どうか死なないでください！」」」」
いつの間にか多くの河童たちがその場に居た。
「何なんだい、これは…」
「私が呼んだのよ」
紫が雅を華仙の方へ放り、ひとりの方へ歩み寄る。

「言ったでしょう?貴女が拒んでいるだけで、世界は貴方を拒んでいない」
「今更…」
「彼らは一度も貴女のことを拒絶していないわ」
「そんなこと――」
―パサッ―
紫は少し汚れた本のようなものをひとりの前に放った。
「あ、それは私の!」
「貴女を真っ先に止めた彼が書いていた日記よ。中を見れば分かるように捏造もしていない。正真正銘の証拠よ」
ひとりは手に取り、それを裂いてやろうと思った。だが、その前に紫に取り上げられ、無理矢理中身を見せられた。
「あっ…」
そこには彼が書いた自らへの想いが綴られていた。
自分が河童たちの社会から拒絶されていないこと。
山の妖怪も一部を除いて自分に好意的であること。

自らの居場所があること。
そして著者から向けられた恋愛感情。

それを見て、ひとりは一瞬

安心した

「今、少し安心したでしょう？貴女にはちゃんと帰る場所があったのよ」

「あ～！私の秘密の日記がよりにもよってひとり殿に見られてしまった～！」
ひとりの思考は完全に停止していた。沸き上がる感情を押し殺すために。
「貴女が彼に固執していたのは拠り所が彼にしかなかったから」
「違…」
その否定の声は彼女から発されたとは思えないほど弱々しいものだった。
「もしこの河童たちがまったくの赤の他人であればこれ程貴女は動揺していない。動揺しているのは、貴女が彼らに対し悪くない感情を持っているから。そうね、楽しそうだったものね、あの時の宴会」

「あ…」
「その時の騒動だって貴女が助けたいという意思から起こった。それって貴女が彼らに対し好意を持っていないと起こらないでしょう？」
ひとりはもう何も言えなくなった。
「恋心なんて所詮あの男へ想っている己に酔っていただけ。酔いから覚めれば、いかにそれが脆かったか思い知る」
呆然とするひとりの頬を紫はゆっくりとなぞる。
「貴女は彼を愛していたのではない。ただ、彼を自らの存在の拠り所にしていただけ。それを――」

愛とは言わない

「さぁ、決めるのは貴女よ。彼を諦めれば、彼の命は助かるし、貴女も居場所を失わない。誰も不幸にならないわ」

夜が明け、辺りが緋色に染まり始める。

大いなる選択の刻、その妖怪らの行く末を

太陽は見届ける

第十五話

ひとりは確かに雅を愛していた。
それは紛れもない真実。歪なれど、そこに愛は有った。
それゆえ、八雲　紫は毒を打った。
彼女の馴れ初めがただの同情であったことに気づいていたからこそ打てる手であった。

ひとりはそのことに弱冠の後ろめたさを感じていた。しかし、それだけでは彼女の冷静を崩すのには足りない。だからこそ、精神が揺れるであろう死の直前に針を射した。
そこからは簡単だ。動揺して空いた穴に毒を流し込めば良い。それだけで彼女の決心は揺らぐ。思考が開き、選択の余地が広がる。それだけでいいのだ。彼女が迷い、それを正しき道へと導けば良い。

「あたしは…そんな…」

すべては賢者の描いた道筋を辿る。

それを雅はただ黙って見ていた。決して状況が飲み込めなかったというわけではない。むしろ、ひとり本人よりもこの状況を理解していたかもしれない。

ならば、なぜ黙っているのか。

それはタイミングを見計らっていたからだ。ここでいたずらに騒いだとしてもひとりを余計に混乱させるだけ。そう判断して雅はじっとしていた。

「恋人が取られそうだというのに、貴方、やけに静かね」

その雅の様子に疑問を抱いた華仙が口を開く。

「……」

「話す気はない、と。つまらないわね」

「選択権は貴女にあるのよ、ひとり」

「あたしは…どうすれば…」

ひとりは否定しきれない。紫の言うことはでまかせだけでないから。
妖怪の精神は脆い。特にひとりのような他と関わることを避けてきた精神的未熟な妖怪は少し小突いただけで簡単にぐらつく。
「そうね。これだけじゃ不満なら、今後、彼の生活も保障するわ。これならもう迷うこともないでしょう?」
「っ!」
雅の生活も…?
「愚かなる死を選ぶか、利しかない生を選ぶか。賢い貴女なら明白よね?」
「…あたしは—」
それならもあたしはもう…。ここで死ぬのはどちらにとっても不幸なんだ…
「ひとり」
ひとりが選択を終える直前、雅の声が響く。その声は叫び声ではなく、決して大きな声ではなかった。だが、それでもその声はひとりに響いた。
「お前が決めろ。真実を他に委ねるな。自分の想いを否定されたから何だって云うんだ

？」
「でも、雅、それは間違ってなくて―「なぁ、ひとり。頭でっかちなるなよ」
「え？」
「俺たちの仲に正しいとか、間違ってるとか、そんな道理なんて必要ないだろ？愛に正解を求めるなよ」
「華仙、その男の口を閉じなさい」
「はいはい」
　華仙は雅の頭を掴み、地面に叩きつける。
「ブァッ！」
　グシャ　という音と共に間抜けな声を出して雅は地面と衝突する。それでも雅は地のなかで喋り続ける。
「いいか、ひとり。俺は結果に対してとやかく言いたいんじゃない。結果に至るまでの意思の過程を他の意思に委ねるな、と言っているんだ」
「華仙！」
「……」
　紫は語気を強め、華仙に雅の口を完全に塞ぐように要求するが、華仙は逆にその手を

離した。
「ゲホゲホッ」
雅は地面から解放され、いきなりの空気にむせたのか咳き込む。
「どういうつもりかしら…?茨木　華仙…」
「どうもこうもないわ。ただ、この子を抑える気が失せた、それだけよ。不満なら自分で処理しなさい」
華仙は悪びれもなく、そう言い放ち、この件に関しては傍観するような態度を取った。
「ちっ…」
紫は小さく舌打ちをし、手を雅の方へ向けるが、その手をひとりに掴まれる。
「今、何をしようとしてたんだい?」
「離しなさい。離さなければ、あの男の無事は保障しないわ。手元が狂ってしまうかもしれないから」
「そうかい。なら、そもそも手元が狂わないように千切ってやろうか?」
ミシミシ　と紫の腕が軋む。
「ひとり殿!何してるんです!」
そのふたりの間に例の河童が顔を出す。
「その方は貴女を助けようとしてるのですよ!?間違った道から貴女を導こうとしてるの

です！」
「は？」
　ひとりはすっとんきょうな声を出す。
「大体の事情はそちらの賢者様から聞きました。いいですか、河童と人間の夫婦などというのは道理外れなことなのです。きっとひとり殿は寂しさのあまり、勘違いをなさっているだけなのでしょう。しかし、大丈夫です。もう、貴女には我々がついています。なぁ？皆」
　その河童の呼び掛けに河童たちはうんうんと頷く。
「だから、我々と一緒にやり直しましょう？」と手を差し出した。

　その言葉にひとりはハッとした。

　そうか。あたしは思い込んでた。そうであるって。勝手に味方であるとそう勘違いしてた。でも違った。

　こいつらも同じだ。

悪意はなかれど、本質は同じだ。あたしを見ようとしない。
ひとりは他の河童たちの眼を見る。
やはりそうだ。あたしを見ているようでまったく別の何かを見ている。まるで理想の妖怪を見ているかのような…。

「ひとり殿?」
河童は差し出した手が握り返されぬどころか、まったく反応しないひとりに疑問を示す。
「違う…」
「はい?」
「あたしはお前らが思っているような妖怪じゃない」
「それでも構いません。我々は貴女の全てを受け入れます。それが仲間というものですから」
「はは、全てを、かい?」
「ええ!」
「はぁぁ…」

ひとりはその返答にため息をつきながら隙を見て抜け出そうとした紫の脳天に一発ぶちこむ。
あぁ、やっと目が覚めたよ。

「なら、もう間に合ってるよ。あんたらよりあたしを理解してくれようとしてる奴が既にいるんでね」
最初から最後まであたしをあたしと見て、あたしを、ひとりという存在を尊重してくれたのは

雅　だけだ

「雅、悪かったね！少々、取り乱しちまったよ！」

ひとりの語気に力が戻る。
「それで？答えは出たのか？」
雅の問いかけにひとりは雅に駆け寄り、抱きついた。
「あぁ、どうやら最初から決まってたみたいだ。あたしとあんたはずっと一緒さ」

その二人の情景を華仙は何も言わず、ただただ眺めていた。
一方、ひとりが元居た場所には気絶した紫と状況が飲み込めずにいる河童たちが残されていた。
「どういうことだ？」
「結局人間を選んだのか？」
「なぜだ？」
「ひとり殿…」

「運命、かしらね」
ポツリと華仙が呟く。
「様々な紆余曲折を経ても、たどり着く結末は変わらない。最初から決まっていた。そうでしょ？紫」
その問いかけに紫は答えることはなかった。そして、空中に一人の影が現れる。その姿は紅と白で彩られ、まさしく紅白と言えるものだった。
「なんだかやけに竹林が騒がしいと思ったら、どうやら役者が揃ってたみたいね」
その人物は振り袖を、髪飾りを、フワフワと揺らしながらゆっくりと地へ降り立った。

「博霊の巫女…！」
「そう、あなたが例の河童ね。それで、そっちが例の人間と」
　また、増えるのか！
　雅は、もはや極限状態であった。これ以上の戦闘は望めない。
「話を聞く限り、あなたたち夫婦になりたいそうね」
「そうだ」
　ひとりが即答する。
「ふぅん。まぁ、散々言われてきただろうけど、一応私も口を挟ませてもらうとするわ」
　博霊の巫女はそう言うと、一息ついて、髪をかきあげた。
「楽園の巫女として幻想郷で妖怪と人間の夫婦を認めるわけにはいかない」
　その言葉を聞いた瞬間、ひとりの眉間に皺がよる。しかし、巫女の声は途切れない。
「ただし、幻想郷外で結ばれるのなら勝手なさい」
「え？」
　その意外な言葉に雅は驚き、思わず声が漏れる。
「あくまで私の権力が働くのは幻想郷のみ。それ以外は関与しないわ」
「認めるのか…？」

「何か勘違いしているわね。私の仕事は幻想郷の妖怪退治と害するモノの排除よ。あなたたちは後者、河童はどちらともに当てはまるけどこの際は置いとくわ」
「排除…」
「排除といっても話が付くなら追放という形で処理をするわ。もし、話にならないなら殺るけどね」
「ならあたしたちは幻想郷から今すぐにでも出ていくよ」
　ひとりは迷いなくそう答えた。
「貴方もそれでいいかしら？」
　巫女が雅に問いかける。
「あぁ」
「即断即決、話が早くて助かるわ」
「待て！」
　その叫びは今にも消え去りそうな露ほど弱かった。
「そいつらにはまだ償いをさせていない…！」
　その声の主は虎金であった。巫女は彼女の姿を一瞥し、
「そう。悪いけど貴女たちのくだらない自尊心よりも幻想郷の秩序の方が大切なの。二人のことは諦めなさい」

「くそが……！」
　虎金は立ち上がろうとするが、腕に力が入らず、陸に打ち上げられた魚のようにのたうち回っていた。巫女はそれを無視して話を続ける。
「いいかしら。これから貴女たちを幻想郷から追放するわ。その際、守って欲しいことがあるの」
「必ず守ると約束する（さ）」
「一、もう二度と幻想郷には戻ってこないこと。これはこの先どちらかが死んでしまったとしてももう戻ってくることは認めない。もし、幻想郷であなたたちの姿を確認したらいかなる理由があろうとも即刻排除する」
　二人は相槌を打つ。
「一、幻想郷に関する情報を流布しないこと。今の幻想郷はとても不安定なの。時空や境界があちこちで歪んで乱れている。その状態で外部に此処の存在が知れるのはまずい。分かってくれるわね？」
「わかった」
「これくらいかしらね。それじゃあ二人とも、さようなら」
　そう言うと巫女はお祓い棒を地面に突き刺し、印を組む。
「させるかぁ！」

その叫び声の主は紫であった。ひとりからの一撃により意識を失っていたが、最後の最後に意識を取り戻したようだ。地面に這いつくばりながらもスキマを伸ばす。

「紫、貴女も何か企んでたみたいだけど、もう遅いわ」

そのスキマがたどり着く前に二人の姿は消えていた。